

## 神宮遷宮「常若」論抄

牟禮 仁

## はじめに

伊勢神宮で斎行される「遷宮」の意味・意義・理念は何か、行う理由は何か、何を目的として行われるのか。さらにはその本義・本質・真義・精神は何か等々。

このような関心・問いに関連して、古くは、神嘗祭の九月十六・七日（皇大神宮・内宮）、十五・六日（豊受大神宮・外宮。内宮の二年後）にあわせ斎行しなければならないと認識することからは、「式日遷宮」の語が十三世紀半ばに伊勢神宮側で、そして二十年を限り（二十年毎に）斎行しなければならないとするところからは、「式年遷宮」の語が十四世紀半ば以降に朝廷側で用いられ始めた（参照、拙著『大嘗・遷宮と聖なるもの』皇學館大学出版部・平成十一年）。

そして昭和二十八年年度の遷宮に際しては、「造替（営）遷宮」・「祭典遷宮」という語を対比して、本来の目的は殿舎の造替ではなくして、年毎の神嘗祭のために行われる「祭典遷宮」である、

という理解が提示された。さらには、遷宮は二十年毎の、遷御ともなう「大（おお）神嘗祭」であるという認識、表現ともなる。これが、昭和四十八年度・平成五年度の遷宮に際しては、その意義づけの基本となっていたといえる。

一方、このたびの平成二十五年年度・第六十二回の式年遷宮に際しては、その意義を理解し、説明するキーワードとして「常若・とこわか」の語とそれによる論が流通している。その論の経緯、内容、特徴、問題点などを考えるための資料集録を目的として、本「抄」をまとめる。

## 凡例

- 一、本集録は、伊勢神宮遷宮の目的・意義・意味・理由・精神・思想等を主に「常若」の語で理解し、説明する文を抄出し、集録した。なお、同義の語（常に若々しい等）や「大神嘗祭」論の一部も採録した。
- 二、採録対象は、活字・インターネット媒体から随時管見に入っ

た限りの論説となる（なお、管見の全てを抄出してはいない。とくにインターネット媒体）。当然、漏れているものが存する。

また、抄出の範囲は私の関心・判断による。

三、対象とする採録期間は、戦後から平成二十五年八月三十一日までである。

四、採録件数は一七七件、うち個人一〇〇、組織二五、ジャーナリズム・マスコミ三五、その他（重複を含む）となる。

なお、インターネット・Googleで「伊勢神宮 遷宮 常若」を検索すると平成二十五年七月十八日現在、約二、五〇〇件、「常若」だと一億件を超える。

五、配列は、発表年月（日）順とし、通し番号を付した。なお、時期を三期に区分した。（解説「2」参照。）

六、「常若」の語の本論抄での初見は、一般用語としては01臼田甚五郎「神宮奉頌歌」（昭和二十六年）、神宮遷宮に関するのは02幡掛正浩「障子とガラス―神宮式年遷宮の意義にふれて―」（『神社新報』昭和四十年五月二十九日号）となる。

七、執筆者の所属・役職等を、わかる範囲で初出個所に付した。

八、「常若」並びに類する語（常に若々しく・若返り等）に傍線を、「大神嘗祭」の語には、傍線を付した。また、ポイントとなる論の題目を強調表示した。

九、「常若」の内容はなにか、何が「常若」なのか等、用例を次のように分類し、各項目の頭に付した。

(A) 国（国家）・民族・国民、生命と関わらせる

(B) 天照大神・神威と関わらせる

(B a) 神宮の伝統・環境などと関わらせる

(C) 神道・神社と関わらせる

(D) 日本の伝統と関わらせる、または不特定

(※) 「大神嘗祭」論

(丁) 発信者―伊勢神宮・同関係者

十、本「抄」と同様な作業を「大神嘗祭」論についてまとめたのは、牟禮「神宮遷宮「大神嘗祭論」抄」（『皇學館大学神道研究所紀要』17、平成十三年）である。そこからごく一部と、平成十四年以降の例を本「抄」に収めた。なお両者を対比すると、遷宮の意義づけが「大神嘗祭」論から「常若」論へと推移する状況が知られる。

十一、「常若」の語・論と関連して「中今・なかいま」の語・論があるが、本「抄」での採録は数件のみにとどめた。

十二、仮名遣いは原文にしたがった。改行は追い込みとした。

十三、「常若」の語がつく戦前の図書名を国会図書館NDL・OPACで検索すると、『歌集 常若集』（光永比佐夫編、新進歌人社、昭和十年）、『国土常若』（藤原超然著、高日本社、昭和十七年）の二著がある。

十四、末尾に「解説」を付し、集録した「常若」論について語意・経緯・内容等を整理し、留意点などについて述べた。

### 《第一期》

【昭和二十八年年度・四十八年度】「大神嘗祭」論が昭和二十八年度から見え始め、四十八年度に広まり、前回遷宮までは基本的、一般的な説明として用いられた。（事例は凡例十、参照）「常若」の用例はごくわずか。

01臼田甚五郎（國學院大學教授）「神宮奉頌歌」（神社本庁創立五周年記念）昭和二十六年

D\*二、大和島根の常若に青人草のいやしげく広きみ恵みしき

ませる御祖の神をたたへつつ

02 幡掛正浩（神宮教学司）「障子とガラス―神宮式年遷宮の意義にふれて―」『神社新報』昭和四十年五月二十九日

A・J\* ガラスは言ふ「式年造替などいふムダはよして、コンクリート社殿に改めて永久保存を図れ」と。障子は答へる「問題は耐久論ではない。二十年を一期として常若に更新される生命の儀礼に意味を認めるか否かといふことだ」と。神宮大麻が年毎に新しく祀り更へられるのはなぜだらう。すべて「障子」に象徴せられる植物的生命のいとよなみの精神の故ではないか。此の国風の古俗の文化精神が、莊嚴無比なる公の神事として脈々として伝承せられ、常若に民族生命のよみがへりを約束してきたことが、神代よりこの方久しい我々の祖先の確信であり、外ならぬ伊勢の神宮の式年遷宮祭の精神と、意義と、事実であった。

03 谷省吾（皇學館大学教授）『神道原論』「序説」、皇學館大學出版部、昭和四十六年六月

C\* 現代神道の課題 神道は、よみがへりの信仰だとも言はれる。神道は常に若く、われわれもまた若くなければならぬ。（中略）式年の遷宮を奉仕することによって、神宮の信仰には永遠の若さが生きてゐる。

04 櫻井勝之進（神宮禰宜）「不滅のいのち―常若の祈り―」『みちづけ』6、昭和四十六年八月↓「カミ・くに・人」多賀大社、昭和五十八年四月

A・J\* わが国では、天地と共に窮りなかるべし、と仰せられた大御神のお言葉通り、一系の天子は万古に仰がれ給うて不動である。敗戦憲法すらこれだけは変更できなかった。その秘密は何か。私は常若の祈りとその実行、これこそ祖国の不滅の根

元であると信じる。神宮の式年遷宮、この二十年を周期とする国の若返りは、まさにその最高の祈りであり、実践である。「常」若返りを繰り返して永遠の生命に生きる祖国と共に。これが日本の心である。

05 「論説 国民総参宮の意義」『神社新報』昭和四十八年十月二十二日

B\* 式年遷宮こそは、新しい御社殿において新しき神威をいたぐ、信仰のよみがへりの祭りでもある。この新しくして常若なる神威を戴くために、国民総参宮が行はれる。一人でも多くの国民が、御神威にふれ、正しき神宮信仰が弘まることは、たゞに参宮者の信仰のよみがへりばかりではなく、わが国家生命のよみがへりにつながる大事である。

### 《第二期》

【前回平成五年度に際して】「大神嘗祭」論が主で、「常若」論が見え始める。

【昭和六十年】

06 鈴木義一（神宮禰宜）「式年遷宮」『国史大辞典』吉川弘文館、昭和六十年↓「神道史大辞典」平成十六年

B・J\* いよいよ遷宮の大儀が行われる。もちろん新しく作り替えられるのは殿舎ばかりでなく、御霊代以外のすべての神宝・調度品に及ぶ（中略）。（中略）これはすべてを新しくすることによって神威の一層の更新（若がり）を乞い奉る意と解される。

07 二条弼基（神宮大宮司）「山口祭・木本祭五月二日に 第六十一回神宮式年遷宮陛下が日時御定め」『神社新報』昭和六十年四月一日

A・J\* (二条朝基大宮司の記者会見は、去る三月二十二日神宮司庁でおこなはれた。) 全国の皆さまにおかれましては、わが国の無窮と民族の常若への祈りをこめて上古以来二十年毎にくり返しくり返し厳格に斎行せられてきました神宮式年遷宮の意義を充分おくみとりいただき、昭和六十八年秋に予定されてをります第六十一回神宮式年遷宮が国をあげての奉祝のうちに古儀に違ふことなく厳肅に斎行されますやう、皆さまの絶大な御協力を切に願ひ申上げます。

### 【平成三年】

08 矢野憲一 (神宮禰宜) 『伊勢神宮 日本人のこころのふるさとを訪ねて』講談社カルチャーブックス31、平成三年十月

A・B・C・J\*ほとんどの人は遷宮というとお宮を遷すだけだと思っている。そうばかりではない、神殿を新しくし、神に生まれ変わっていただくことで、日本の国も生まれ変わりたいという深遠な思想と信仰が込められているのだ。古代には土地にも霊があり、国には国魂というスピリットがあると信じていた。実は遷宮はその国魂を新しく若々しく強力にすることで、日本がみずみずしさを取りもどし、日本の国と民族の自覚を高め、信念と誇りを新しくして永遠の発展を祈ろうという祭りである。神道には「常若」という理想がある。常に若々しく元気で「弥栄」をめざしたいという信仰である。それにはなるべくフレッシュな状態を保つべきであり、神のお住まいも常に気持ちよく新しくしておきたい。その理想のために、古代は社殿を毎年遷宮していたのではなからうか。これはあくまで仮説である。そんなこと無理だろうといわれるだろうが、私はおそらく毎年、造営がなされた時代があつたと確信する。

### 【平成五年】

09 村田仙右衛門 (お白石奉獻団総委員長代理) 『お白石奉獻団出初式 旧神領の代表が参加して』『神社新報』平成五年四月十九日

A\*御遷宮は「祖国日本の常若への道」であり、このお白石奉獻が今世紀納めの行事となりますだけに、われわれ八十団が心を合はせ、手を結び、清明と歓喜をもって、御奉仕に専念する覚悟であります。

10 『第六十一回 神宮式年遷宮』神宮司庁、平成五年十月

※\*式年遷宮の意義 式年遷宮の意義を一言でいえば、大(だい)い(い)神嘗祭といえます。(中略) この神嘗祭を最も鄭重にした祭が式年遷宮なのであります。殿舎はもとより御装束・神宝にいたるまですべてを新しく調べて、大御神様にお遷りを願ひ、いわば、天地のすべてが一新された状態で、神嘗祭を御奉仕するわけがあります。これにより、あらためて大御神様の広大無辺なる御神恩を蒙り、国の若返りと永遠の発展とを祈念するのです。そして国民もまた、日本民族としての自覚と信念を新たに御代の栄をお祈り申し上げるのです。この儀式があることによって、日本の国が常に若返りつつ、永遠に潑刺として民族の生命を保ち得て、今日に至っているといってもよいでしょう。

11 『将来世代としての私』私を超える叡知を式年遷宮に学ぶ (一) 『第二回将来世代留学生フォーラム』平成五年十月十六日、[http://www.katugaku.com/katugaku\\_sya/kakoron.asp](http://www.katugaku.com/katugaku_sya/kakoron.asp)

D\*朽ちるべき運命の木を使い、原始的な工法で造られる伊勢神宮の神殿は「式年遷宮」という日本民族の心と技、それを永遠に伝えていく祭によって20年ごとに蘇り、1300年の歳月を経て、今なお端正な姿を伝える。200〜300年後の遷宮のために

計画的な檜の植林を行いながら、魂を「常若」に、世代間継承し、元のあるべき姿を子々孫々にまで伝えていこうとする式年遷宮の思想（中略）。

【この間（平成六～十年）、「常若」事例は管見に入らず。】

【平成十一年】

12所功（京都産業大学日本文化研究所長）「世界から注目される式年遷宮。常若」の英知』『神社新報』平成十一年六月二十一日

D\*私が「日本の聖地、古くて新しい伊勢神宮―二十年ごと」に継承する「常若（とこわか）」の英知―と題して基調報告をおこなった。すなわち、日本で最も著名な聖地・伊勢の神宮は、木造建築だけれども、千数百年来の姿と心を今に伝へてゐる。（中略）（7）これによって伊勢の神宮をはじめ全国の神社では、自然を敬ひ祖先を尊ぶ祭祀が、常に若々しい「常若（everlasting youthfulness）」の生命を保って現代に続いてゐる。

【平成十二年】

13所功「伊勢神宮の式年遷宮の意義」『あふひ』6（京都産業大学日本研究所所報）、平成十二年九月

※・B\*式年遷宮の最も重要な意味は、真新しい神殿に美しい神宝・装束を飾り、そこへ御祭神に遷っていたから、そこで大御饌（神饌）を神々に差し上げる祭儀の中に込められてゐる。（中略）その毎年の神嘗祭を二十年に一度、神殿も何もかも新しくして真夜中に行う「大神嘗祭」が、式年遷宮祭にはかならない。それによって、本来の清浄な境地を取り戻し、新しい活力みなぎる生命の甦りを仰ぎ、常に若々しい「常若（とこわか）」の神威を保つことができるであらう。

【平成十四年】

14所功『天皇の人生儀礼』小学館文庫552、小学館、平成十四年一月

※\*しかも、それは単に殿舎を原型どおりに建て替へることだけが目的なのではない。むしろ、より重要なことは、一年中毎日朝夕供進されている大御饌（神々の御食事）、ないし毎年旧曆九月（現在十月）勅行されている神嘗祭（新穀による神饌供進）を、二十年に一度、建物も神宝・装束（殿舎の装飾など）もすべて造り替へた上で、新穀による神饌を供進する「大神嘗祭」を実施することにはかならない。そして実は、これが歴代天皇の務めてこられた宮中賢所の皇祖天照大神を祀る祭事と一体をなす天皇の勅命（戦後は聴許）による最大級の皇祖祭祀なのである。

15中西正幸（國學院大學教授）「遷御を中心として」『東神（東京都神社庁報）』平成十四年十月

※\*神嘗祭とはその年の新穀を初めて召し上がることで、神宮の正月は神嘗祭からという祭祀儀礼もある。その前に遷宮を行い、神様には新しい神座で御饌を召し上がる。大きな神嘗祭、それは二十年ごとに来るといふ大神嘗祭という言葉が神宮に定着してきた。神宮の装束あるいは祭祀の用具などは、神嘗祭当日をもつて全部取り替えられる。日本人にとって正月とは、新穀を食べるところの神嘗祭当日であり、そういう画期的な日だからこそ、それまでに神遷りを済まして、早稲の新穀を食べるという手順となる。遷宮祭といふのはあくまで神嘗祭の祭りのために行うための祭場の準備に他ならないと言えるのではない。

※\*遷宮が目的なものとして当初からあったのではなくて、神嘗祭の遷宮であり、従って本命は神嘗祭であるということだけ

はしっかりと考えていただきたい。

### 【平成十五年】

#### 16 神宮司庁『神宮のおまつり』平成十五年二月

※・J\* 遷宮の本義とは「大神嘗祭」と称されるように新たな神座で初穂を召し上がるため、遷宮と神嘗祭が一体となることが理想視されていたのです。檜の香もかぐわしき新殿に大御神の遷御を請いまつり、その新殿で今年の初穂をもつて備えた御饌、御酒をお供えするところに、式年遷宮の意義をうかがうことができます。すなわち二十年に一度、できるかぎりの鄭重さをつくして、御調度品(御装束・御神宝)・御住居(新殿)を一新し、厳肅かつ盛大に神嘗祭を奉仕するということです。式年遷宮は報恩感謝の祭儀であると共に、新たな大御光を仰ぎまつる厳かな儀式です。

### 【平成十六年】

#### 17 北白川道久(神宮大宮司)「技術のころ、日本の伝統」『神社新報』平成十六年二月九日

D\* 特別シンポジウム「技術のころ、日本の伝統遷宮からハitekまで」(主催・社団法人日本工学会) 北白川大宮司は千三百年、六十一回に亙りおこなはれてきた遷宮を、わが国の伝統的な「常若」の考へ方に倣って説明、「常に若々しく清々しい空間に神様は宿る。遷宮は時代の推移を超え民族の伝統を守りたかったといふ日本人の心の表れではないか」と説明した。さらに遷宮の伝統技術伝承の側面なども紹介した。その上で「未来の悠久と繁栄を、論理を超えた素直な祈りを通して根源的に語りかけてゐるのが遷宮ではないか」と述べた。

18 琴陵谷世(愛媛・金刀比羅宮宮司)「つ挨拶」[http://www.kompira.or.jp/event/2003\\_senza/senzasai/senzasai\\_a.htm](http://www.kompira.or.jp/event/2003_senza/senzasai/senzasai_a.htm) 平

成十六年四月

C\* 遷座の目指すところは「常若」。常若は神道の理想のひとつ。

#### 19 神宮司庁「リーフレット 第62回神宮式年遷宮」平成十六年秋

※\* お供えの神饌をはじめとして、清浄を尊び行われる神宮のおまつり。中でも、全てにわたって清らかに装いを整えて行われる、二十年に一度の「大神嘗祭」。それが「式年遷宮」です。B・A\* 全てを清らかにあらため、神々はいいよ若やぎ、国も人も共に若返る(中略)。「式年遷宮」は、主旨、構成、規模において壮観類を見ない、晴れやかな民族の一大祭典です。

#### 20 伊勢大祭委員会・伊勢おまつり運営委員会「奉祝神嘗祭」(チラシ)、平成十六年九月

※\* その年にとれた初穂を、感謝をもって大御神にお供えをする「神嘗祭」。年間千数百という神宮のお祭り、最も大切なおまつり。この神嘗祭が二十年の時を刻むと『大神嘗祭』となり、『式年遷宮』となる。

#### 21 神宮司庁、揭示板(内宮古殿地石段脇)「式年遷宮について」平成十六年秋建つ

A・J\* ここは西の御敷地です。東の御敷地と同じ広さがあり、二十年に一度、御正殿を始め、御門・御垣などの御建物と御装束神宝のすべてを新しくして、大御神様に新宮へお遷りいただくお祭りが式年遷宮です。天武天皇の仰せにより、次の持統天皇四年(六九〇)に第一回が行われて以来、現代まで千三百年間にわたって受け継がれてきました。来る平成二十五年の第十二回式年遷宮には、ここに新しい殿舎が建てられ、大御神様のご遷座を仰ぎます。この大祭には古代より常にみずみずしく、国も人も若がえり、栄え行くようにとの深い祈りが捧げられて

まいりました。

22 神宮司庁、神宮掲示板（内宮手水舎脇・外宮正面参道口）「第六十二回神宮式年遷宮」奉賛のお願い」神宮司庁、平成十六年秋建つ

D・J \* 式年遷宮は二十年に一度、御正殿を始め御門・御垣などの御建物と御装束神宝のすべてを新しくして、大御神様に新宮へお遷りいただき、国と国民の平安と発展を祈るわが国最大のお祭りです。持統天皇四年（六九〇）に第一回目が行われて以来、今日まで千三百年間にわたって受け継がれてきました。

### 【平成十七年】

23 藪田稔（京都大学教授）「『悠久』と霊的生命観」『悠久』100、平成十七年一月

※\* 神々もまた年毎の祭にミアレ（出現・誕生）し給う。二十一年に一度の神宮の式年遷宮も、太古さながらの更新をもって悠久のご神格を繰り返し繰り返して体現し給う大神嘗の祭である。いわば世ごとの新生をもって太古不変の大生命を招来する。

24 鳥海芳行（神宮権禰宜・神宮司庁教学課長）伊勢学講座P A R T 2 「第62回神宮式年遷宮記念」第一回「遷宮ってなんだろう？」そのころ、緒祭の意義、スケジュール」平成十七年二月十九日

C・J \* 伊勢青年会議所が発行されている広報紙の今年の新春号に、理事長と北白川大宮司との対談が掲載されています。その中で大宮司が遷宮について言っていることを申し上げます。「中略」神道には『常若』という考え方があり、常に若々しく清浄でありたいという願いがあります。神様に清々しいお宮にお移りいただいて、さらなるお力を發揮していただくということは、世界でも類がなく、永遠をめざし現在に生き続ける日本

の歴史であると思います」というふうに述べています。

D \* 遷宮の精神的な意義には、一つは、私ども国民と陛下を中心とする皇室、そして神宮の三つのきずなを再確認し合う絶好の機会となることです。

25 神宮式年遷宮広報本部「神宮・遷宮Q & A」公式ウェブサイト、<http://www.senguinfo/gand02.html>、平成十七年春

\* 神宮の祭りの本義は、天皇が御親ら皇祖天照大神をおまつりされることにあります。

※\* 遷宮祭とは、20年に一度お宮を立て替へ御装束・御神宝をも新調して、大御神に新宮へお遷りいただくお祭りです。式年遷宮は神宮最大の重儀で大神嘗祭（おおかんなめさい）ともいわれ、社殿や御神宝類をはじめ一切を新しくして、神嘗祭を完全なかたちでとり行うところに本来の趣旨があります。

A \* Q なぜ20年ごとですか（中略）20年ごとに生まれかわるという発想、これは世界のどの国にも見られないものです。しかも、神宮が新しくなることで、大御神の、より新しい御光をいただき、日本の国の「イノチ」を新鮮にして、日本全体が若返り、永遠の発展を祈るのです。そこには、常に若々しい生命の輝きを求めて止まない日本の民族性を伺うことができます。

26 社団法人三重県観光連盟「伊勢神宮―式年遷宮始まるお伊勢さんへ―」『三重観光ガイド』平成十七年春

※\* 神話では、天照大御神が孫のニギノミコトに、三種の神器とともに高天原で育てた稲穂を渡し、国を治めるように告げる。神嘗祭では、その稲穂が今年も無事に出来ましたと報告し、感謝する。「式年遷宮」は、この神嘗祭の大きかりなものとされ、稲の収穫期にあたる秋に行われる。二〇年に一度は、神さまに新しい住まいで、新米を召し上がっていただくというも

のだ。

27 「遷宮チャンネル」ホームページ、平成十七年春

A\*20年に1度の大祭、神宮式年遷宮は、御正殿をはじめ神宮すべての神殿や神宝を新しく作り替え、御神体を新宮にお遷しします。このお祭りは、大御神様の廣大無辺な神恩が益々豊かになることを祈り、その神恩を戴いて国の若返りと永遠の発展を願う大切なお祭りです。

28 近鉄「時刻表」宇治山田駅発行、平成十七年三月

※\*神嘗祭が20年の時をむむと『大神嘗祭』となり、『式年遷宮』となります。

29 酒徳莞爾（神宮禰宜・祭儀部長）「神宮式年遷宮の概要と平成

十七年度諸祭について」『瑞垣』200、平成十七年三月

A・J\*神嘗祭は（中略）皇祖神に感謝を捧げ、御神威の発揚を願い、国家と皇室の隆昌、民族の繁栄を祈る重儀である。この神嘗祭を二十年に一度、神殿をはじめ神宝、装束類、祭器、調度品等々の全てを新調し、大御神に新宮へお遷り願って齋行し、国家国民の「常若」と悠久の平安を祈ることこそが、式年遷宮の本義と考えてよいのではないかと。

○平成十七年三月 木本祭・山口祭日時御治定

### 《第三期》

【今回遷宮に際して】右、平成十七年三月の木本祭・山口祭日時御治定前後を期として「常若」論が広まる。そしてここ一、二年は数も増え、主となる。反比例して「大神嘗祭」論は影を薄める。  
30 北白川道久「北白川大宮司が記者会見」『神社新報』平成十七年三月二十一日

A・J\*天皇陛下には、このほど神宮式年遷宮の御造管用材を伐り出す御柚山と、遷宮諸祭の最初の重儀である山口祭・木本祭の齋行日時を御治定遊ばされた。これを拝し北白川道久大宮司は三月九日、神宮司庁で記者会見をおこなひ、「天皇陛下には御遷宮に対する深甚なる聖慮をお示しいただき、その責任の重さを痛感致しますと共に、二十年に一度御神威も新たに、我が国が常若に榮えゆくことを祈る伝統ある重儀をつつがなく齋行申し上げ、大御心にお応へ申し上げる覚悟でございます」との談話を発表した。

31 服部憲明（愛知・岩津天満宮宮司）「宮司メッセージ」通巻

第102号、平成十七年四月一日 <http://www.iwazutenjin.or.jp/archives/index.html>

常若（とこわか）の祈り

A\*二十年ごとに生まれかわるという発想は世界のどの国にも見られませんが、日本人は新しいお社を造り大神様にお遷り願うことで、更に輝かしい力強い御光をいただき、日本の国の「いのち」が更に新鮮に、国全体が若返り、永遠に発展するよう祈り続けてきました。

A\*私たちは親から「いのち」を授かり、その「いのち」に生かされています。それは、遠い祖からその「いのち」を預かっているというので、だからこそ「いのち」は尊いものであり、私たちはこの「いのち」を大切に子孫に伝えていかねばなりません。この尊い「いのち」の働きを日本人は「カミ」と仰いできました。年が改まる毎に、お社を造り替える毎に、日本人の「いのち」が常に若々しく蘇るように求めて止まない常若（とこわか）の祈りを、遷宮の諸儀式に垣間見ることが出来るのです。

32 岩本文磨（兵庫・射楯兵主神社宮司）「遷宮元年を迎えて」『みづく』80、平成十七年五月

A\*この式年遷宮は、大神様のよみ返り・若返りの儀式と言われていますが、言い換えれば日本国と我々国民の若返りでもあります。それは大神様のご神殿（お住まい）やご神宝（日用調度品）をすべて新しくする事によって大神様が更に御光を輝かされ、国民はその新しい御光を戴いて活き活きとした日々を過ごすことができるからです。

33 矢野高陽（神宮司庁総務課）「神宮だより―神宮の榊」『神社新報』平成十七年八月二十二日

Ba・J\*一年を通じて常に青々と照り輝く榊の生命力と清らかさは、清浄を基とし、常若の理想を実践する神宮とは切っても切れない関係といえるでしょう。

#### 【平成十八年】

34 「伊勢の神宮展」（博多）展示パネル解説、霞会館、平成十八年一月

D\*七世紀の終わり、持統天皇の時代に伊勢の神宮では二十年に一度、社殿を新しく造り替え、神を遷し奉る儀式を行うことが定められました。その根本には、二十年ごとに神さまを新しいお宮にお引越しいただくおまつりを繰り返すことにより、国を安らかにし、豊かな実りもたらしてくれる、そのお力が常に若々しく保たれるという古来の考え方があります。

35 中西正幸「天皇家と伊勢の神宮」『神道と日本文化』戎光祥出版、平成十八年四月

※\*遷宮は二十年に一度を期して、より鄭重に神嘗祭をとり行う意味では、大神嘗祭という言い方ができるかもしれませぬ。神嘗祭というのは、一年最大の収穫祭である（中略）。そ

して大きな神嘗祭を迎えたならば、御殿も宝物もすべて改めて真つさらな中で神様も甦りいただき、早稲の初穂を召し上がっていただく。これが非常に大事なことでありませぬ。

○伊勢神宮式年遷宮奉賛会設立、平成十八年四月二十一日

36 大野康孝（長崎・本渡諏訪神社宮司）「常若の祈り、中今のつとめ―民族派青年有志「神宮参拝研修の集い」開会にあたりて―」平成十八年四月↓『講話集 朝北のいぶき―第二十二回神道講演全国研修大会北海道大会』神道講演全国協議会、平成十九年六月

B・A\*来る平成二十五年度齋行の第六十二回神宮式年遷宮の御儀の一端を伺うにあたり『常若と中今』の思想を学びました。式年遷宮はただ単に神殿新築と引越しの祭りではありませぬ。二十年を一区切りに一巡して神々もまた新たな生命を甦らせ給う、修理固成の岩戸開きの大御祭なのです。その目的は天照大神の大御命を常に若々しく保って戴き、この神国日本もまた神々の稜威の更新により、物心共に甦って健全ならしめる深い祈りに淵源するのです。大いなる神々の悠久の生命の連続「常若の祈り」に徹する、過去現在未来の真只中の今に生きる我が民族の叡智であり、この「中今のつとめ」は禊祓いの心に始まるのです。（中略）大いなる剣魂を振起して『常若の祈り、中今のつとめ』に徹しようではありませんか。

37 丸山公紀「JOGWing 国際派日本人の情報ファイル」No.11

35、ホームページ、平成十八年五月

Ba\*日本人は、20年を一区切りにして、神宮を建て替え、そのご神体をお遷し申し上げ、ご神威を甦らせるとともに、そこに永遠の魂の継承を見てきたのであり、換言すれば新しい中に、永遠の大神の息吹を信じてきたのである。（中略）日本人は、

古くて新しい神宮の姿に常若を祈るとともに、この国の心と姿をそれぞれの時代のなかに問い、神々とともに人として生かされていることへの感謝の気持ちを表わしてきたのであり、いわば日本人の原郷といつて過言ではない。

38 三重テレビ放送番組審議会、平成十八年六月十九日、ホームページ

D \*特別番組「時を紡いで」遷宮・お木曳の記録」について好評。委員からは(中略)「20年ごとに生まれ変わる『常若(とこわか)』の哲学を柱に、今後もシリーズで制作してほしい」といった意見が出た。

39 第62回神宮式年遷宮用材奉曳本部「魂の継承」平成十八年六月頃

※\*神様のお正月・神嘗祭(中略)この毎年齋行される神嘗祭が、二十回重ねられると大神嘗祭、つまり御遷宮となるので40伊勢神宮式年遷宮奉賛会『伊勢神宮式年遷宮Q&A』平成十八年七月

A \*二十年に一度生まれかわるという発想、これはどの国にも見られないものです。しかも、伊勢の神宮が新しくなることで、大御神の、より新しい御光をいただき、日本の国のイノチを新鮮にし、そして、日本全体が若返り、さらに永遠の発展を祈るのです。

41 「てんかふだより」<http://enkafuhijitsukan.com/?day=20060818>、平成十八年八月十八日

B a \*伊勢検定勝手に予想問題

問2伊勢神宮は何年かに一度、神殿を新築して神々を遷す式年遷宮がおこなわれます。さて何年に一度でしょう?  
1. 5年 2. 10年 3. 15年 4. 20年 正解は4番20年です。

伊勢神宮は常若の思想を持っているため。(伊勢検定には記載) 42 中川知博「Coffee Break 常若の国―日本」、インターネット、平成十八年九月七日

C \*なぜ20年に一度なのか。(中略)もう一つは、造宮する側の技術の伝承です。神道には、「常若(とこわか)」という考え方があります。神のお住まいは、常に若々しく、気持ちよく新しくしておきたいという思いが、色濃く影響しているのです。

43 野口健(アルビニスト)「憧れの伊勢神宮にお参り」平成十八年十月四日 <http://www.noguchi-ken.com/M/2006/10/50705598.html>

C \*なぜ20年に一度かというのは、人生の1区切りが20年と考えられ、また技術の伝承するためにも合理的な年数とされています。(中略)神道には常若(とこわか)と言う言葉がありますが、心を継承してゆくけれど、表に出てくるのは新しい姿。ハードは新しくソフトは古い。

44 第62回神宮式年遷宮用材奉曳本部「シリーズお木曳行事 第七回」平成十八年十月

※\*「神さまのお正月」ともいわれているのが、毎年10月に行われる「神嘗祭」。その年にとれたお米を大御神さまに奉納し、収穫に感謝するおまつりです。神宮では、年に一度この祭典のとき御装束・祭器具も改めます。そのお祭りが20回重ねられた時、規模を大きくすべてにわたって清らかに一新されるのが「大神嘗祭」。それが「式年遷宮」です。

45 矢野憲一「伊勢神宮―知られざる杜のうち」角川選書402、平成十八年十一月

「常若に弥栄目指す」

C・J \*徳若とは、常若(とこわか)の変化した語で、常若と

はいつも若々しいこと、永遠に若いこと。これはまさに神宮の式年遷宮の目指す理念である。常若という言葉は、室町末の「天正本狂言」や「名語記」(二二七五)に出てくるが、「古事記」や『万葉集』にある常世・常宮・常葉・常恒と同じようにめでたいことで、神宮の古文書にも古くからみえる、神道での理想の一つである。常に若いとはすばらしいことだ。不老長寿もいいが二十の若さをいつも保てたらこんな結構なことはない。

式年遷宮は、二十年ごとに社殿や神宝・装束などを新しくすること、常に光り輝く神殿や信仰、技術や文化をフレッシュに保ってきた。遷宮は単なる神様の引越しではない。深い深い意義があるのだ。これは簡単に表現しにくい、太陽が夜になれば沈み、また毎朝新しく甦って昇り、正月には初日となって迎えられるように、二十年ごとに日本の国の魂が生まれ変わるとして、民族あげての祭典をするのである。国魂といってもわかりにくい、『万葉集』の時代はすべてのものに魂が宿るとされた、米には稲魂、木には木霊、言葉には言霊、土地にはその土地の霊、国には国魂があり、それらをフレッシュにする。とで、わが国はいつも若々しいよ栄える、つまり弥栄になると信じてきた、そして永遠を目指すために再生するのである。生まれ変わらせなければ永久には生きかえらない。これは稲作からの思想であろう。

式年遷宮には、二十年ごとの大神の新しい力、それは光に譬えるしかないが、新しい御光を迎えることである。そのためには神殿から調度品まで新しくして、われわれが祖神様に二十一年に一度の親孝行をするのだと思う。この繰り返しにより永遠の常若を目指すのである。前回の遷宮のときに、そんな問答をテレビ局の美人レポーターとしたら、常若という言葉がとても気

に入り、目を輝かせて「いいですね、伊勢の人は、うらやましいですね」と言うから、伊勢ばかりではない、日本中がですよと答えたが、常若は理想の夢で、(中略)。問題は精神なのだ、気持ちの持ち方なのだ。

46 「遷宮ニュース 式年遷宮について語る夕べ」『神社新報』平成十八年十二月八日

Ba・J\* (伊勢神宮式年遷宮広報本部、伊勢神宮シンポジウム「式年遷宮について語る夕べ」平成二十五年十一月二十八日) 神宮司庁の河合真如広報課長が「常若―世界で一番古くて新しい伊勢神宮―」と題して講演。「神宮には自然と共生する祭り文化があり、昔の暮らし、自然環境を守りつつ民族永遠の祈りを継承している。繰り返し神に感謝の祈りを捧げることで永遠に瑞々しく若々しい姿を保っている」と語った。

#### 【平成十九年】

47 錦田剛志(島根県立出雲古代歴史博物館学芸員・現島根県神社庁参事)「伊勢神宮の遷宮と神宝」『神々の至宝祈りのこころと美のかたち』島根県立古代出雲歴史博物館、平成十九年三月  
※\*神宮にとつて神嘗祭は、最重要の大祭である。したがって、遷宮とは、二〇年に一度、御殿や御装束神宝類をすべてあらため、清々しい新宮へと神饌(御神体)を渡御して、極めて鄭重荘厳に行われる「大神嘗祭」であったと考えられている。

48 神道青年全国協議会神宮式年遷宮のこころを守り伝える委員会「神宮式年遷宮啓発活動の指針・こころを守り伝えるために」平成十九年三月

A・B・※\*式年遷宮は単に老朽化した社殿を一新するといふことだけが目的ではなく、二十一年に一度の大祭を鄭重且つ厳粛に執り行ふために、社殿を造替し、御装束神宝を新調する

のである。従って、式年遷宮とは二十年に一度の大神嘗祭と言へる。更に言へば、御造宮や御装束神宝など、工匠の技術伝承に留まらず、生命の若返り、未来永劫の存続、そして次世代の継承といふ理念を併せ持つ、まさしく「日本の『ころ』」とも言ふべき民族の一大祭典なのである。この神宮式年遷宮に触れることにより、昔のままの神宮を今この目に拝することができ、神宮の恩恵を五感に感じ、我々日本人の精神まで若返ることができるのである。天照大御神の御神威の永遠の更新を願ふ式年遷宮は、まさしく日本人の『ころ』と言へ、日本文化の精髓であると、言っても過言ではない。神宮式年遷宮が滞りなく執り行はれ、神宮が存在し続けるといふことは、天皇を戴く我が日本が恒久的に栄えてあるといふことの証である。

49 野呂昭彦（三重県知事）「日本まんなか共和国文化首都越前2007」平成十九年五月十三日

Ba \* 齋王の仕えた伊勢神宮の社殿は20年に一度、新しく建て替えられることになっており、式年遷宮という最大の祭典となっており、これにより伊勢神宮は「常若」の状態で生き続けており、この常に新しい視点をもつことの意味を次の世代に引き継ぎたいと考えております。

50 「神々の深き知恵―伊勢行その1（三重県）」投稿者水田英雄（千葉県、平成十九年五月）

C \* 式年遷宮を行なういわれは、神道の「常若」（常にみずみずしく、新しく）の精神によると言われています。

51 千家和比古（鳥根・出雲大社権宮司）「御遷宮の心継ぎ」『幽頭』平成十九年六月

\* 万葉集に、「常若・常世・常宮・常葉・常垣」という言葉があります。常に若々しく生き活きとした芽出度い状態を意味し

ます。

D \* 日本の『木』の神社は、「御遷宮造替」されて永遠性をもって更新され、常若・常宮を顕わし、神様もまた、蘇生、御鎮座され続けて「常若・常世・常宮・常葉・常垣」の顕現の真の「聖地」であり続けています。

\* 「御遷宮」とは、神ながらの太古―神代が「中今」として現在に繰り返され蘇えるお住まいを御造宮させて戴いた「初登」の再現ですから、御遷宮のお祭りは「お祭り」の最も根本のものなのです。

（神代―初登が中今に蘇える）

\* 神代に立ち帰るそのお仕えにより、大神様の御霊力も清新に蘇えり更新なされます。

\* 御遷宮とは、正にこの初登の中の更なる根源の崇高な初登に立ち帰り結ばれる極めて稀な「その時」です。

52 中西正幸「伊勢の式年遷宮」岐阜県神社庁岐阜市支部、平成十九年七月

\* 祭儀というものは、すべて原初の繰り返しという建前のもと、時間的においては天地開闢の初めにかえり、空間的には太古の原郷に立ち戻るといふ、約束のもとに執行されるものです。

\* \*二十年毎の大神嘗祭といふべき遷宮祭（大神嘗祭）という祭儀（中略）。

53 神嘗祭奉祝委員会「祭のまつり」（観光パンフレット）平成十九年九月

\* \* \* \* \*として「大神嘗祭」と呼ばれるのが、二十年に一度の式年遷宮。ご神殿を建て替え、御装束神宝の一切を新しくし、神様にお移りいただくお祭りです。

B・A \* 遷宮によって伊勢の神々はいよいよ若やいで力を増し、

国も人々も共に若返ると言われます。

54 岡田芳幸（皇學館大学神道博物館教授）「式年遷宮に於ける御装束・神宝の奉獻と、伊勢の芸能」『お伊勢さんと武蔵』霞会館資料第30輯、平成十九年十月

B\*神宮の祭りは稲の祭りを中心にしたもので、目的は神々へ感謝の気持ちの発露と、「常若」の姿への回帰にある。常若の姿への回帰とは、若く清い新しい生命に満ちあふれた「命のよみがえり」神威のよみがえり」を願うことを意味している。

55 梅坂昌春（神宮・権禰宜）「神宮と式年遷宮」『大北地方の神社と文化』14、平成十九年十月

\*何故、二十年おきに遷宮が行われるのか？

D①社殿尊厳保持説 常若（とこわか）の精神から、社殿を造り替えることにより、常に尊厳有る清々しい姿を保つ事ができる。国の若返りと民族の繁栄を願う思想に由来しているという説。

56 「神宮式年遷宮」『フリー百科事典 ウィキペディア』平成十九年

C\*式年遷宮を行う途を選んだ理由は、（中略）推測される主な理由としては、次の4点が考えられる。（中略）神道の精神として、常に新たに清浄であること（常若「とこわか」）を求めたため。建物がいまだ使用可能な状態であっても、老朽化することは汚れ（ケガレ。気枯れ）ることであり、神の生命力を衰えさせることとして忌み嫌われたため、建物を新しくすることに神の生命力を蘇らせ、活性化することになると考えられたのではないか。

【平成二十年】

57 近鉄「第62回神宮式年遷宮」（観光しおり）、平成二十年二月

※\*「遷宮は大神嘗祭」毎年10月に行われる神嘗祭は、収穫したばかりの新穀を神さまに捧げて感謝する祭です。このときは新穀とともに瑞々しい力を得たいという願いが込められています。遷宮の意義もそれと同じ。遷宮とは神さまに新たな社殿にお遷りいただいて、新穀を捧げる大神嘗祭なのです。

58 EMELON（河崎町）「あるく！マップ伊勢」、平成二十年二月

D\*20年に一度お引越し式年遷宮、それが遷宮です。「常若」の思想に基づき、常に若く清々しい、新しいのちを尊ぶ神道。59 植田十志夫（三重県総合文化センター1副理事長兼事務局長）「美うまし国 三重へ」平成20年2月、www.zenkoubun.jp/print/images/syuppan/tuushin23\_p02\_03.pdf

B\*「遷宮には「常若とこわか」の思想が生きています。「常若とこわか」とは衰えることなく常に若々しいエネルギーに満ちている状態をいい、神宮は式年遷宮によって、20年に1度の若々しい姿を見せるとともに、常に若々しく美しくありたいと願う人々の心の現われでもあります。神宮は式年遷宮によって創建当時の瑞々しい姿を保ち続けています。

60 松平乗昌編「図説 伊勢神宮」河出書房新社、平成二十年八月

D\*古代から伝えられてきた形を保ちながら新しい生命の更新を祈念する式年遷宮へ「常若」の思いに照らす……

61 神嘗祭奉祝委員会「祭のまつり」（観光パンフ）、平成二十年九月

※\*この毎年斎行される神嘗祭が二十年の時を刻むと「大神嘗祭」、つまり御遷宮となり、御神殿を建て替え、御装束神宝の一切を新しくし神様に宮遷り頂くのです。

B\*魂の継承 神宮式年遷宮（中略）二十年をひとつの区切り

として、神の常若を祈るとともに、この国の心を、姿をそれぞれの時代のなかに問い、確信し、千代八千代の弥栄を願うものであり、その根底にあるものは、自然、つまり八百万の神々とともに、人として生かされていることの感謝に他なりません。

62 矢野憲一「伊勢神宮に見るサステナブル第3回 式年遷宮が目指すもの「常若(とこわか)」という思想」日経B P ネット、平成二十年十月三日 [お鎮まりいただきたいといふ、いはゆる「常若」の強い願ひや理想を窺ふことができます。](http://trendy.nikkei.co.jp/eco/ano/A・D・J*生まれ変わらせて永久に若さを保つ古代、特に『万葉集』の時代、すべてのものに魂が宿るとする信仰があった。米には稲魂(いなだま)、木には木霊(木魂・こだま)、言葉には言霊。国にも国魂があるとされた。もちろんオオヒルメムチといわれた天照大神は光の魂であり、日霊である。その神や国の魂をフレッシュにすれば、わが国は若々しく、いよいよ栄える。つまり弥栄(いやさか)になるとされた。20年ごとに日本の国の魂を生まれ変わらせることによって、国家が若返り、そのことにより永遠を目指そうとするのである。これは「常若(とこわか)」という言葉で表す。常若というのは、『古事記』や『万葉集』にある「常世(とこよ)」と同じようにめでたいことである。室町時代の古文書にはしばしば出てきて、いつも若々しいこと、永遠に若いことを意味する。それはまさしく神宮の式年遷宮の目指す理念である。</p><p>63 高城治延(神宮少宮司)「神宮式年遷宮座談会 遷宮で結ぶ人の輪心の輪 第六十二回神宮式年遷宮」『神社新報』平成二十年十一月十日</p><p>B・J*式年遷宮の原動力は何か(中略)ではなぜ掘立柱に茅の屋根の建物が採用されたのか。そこに意義があるわけですがそこには大御神様には常に若々しく、瑞々しく、清浄なお宮に</p></div><div data-bbox=)

64 神宮司庁監修「フクハウチ 伊勢」扶桑社ムック、平成二十年十一月↓再掲載120『神社検定公式テキスト④遷宮のつぼ』日本

文化興隆財団企画、扶桑社発行、平成二十五年二月

D\*式年遷宮はその窮まりとして、天地のすべてを一新し、大御神と皇室、そして国家国民が永遠に若々しく潑刺とした生命力を保つように祈念することにその本義があります。常緑樹の松も枯葉が落ち、新たな葉が芽吹くことの繰り返しでその緑を保つことができるように、神宮もまた、定められ伝えられたかたちを変えることなくすべてを一新することで、瑞々しいままに創建の精神を保ち続けることができるのです。このように、常に新しく若々しくあることを「常若」といいますが、式年遷宮の底流にはこの常若の思想があると考えられます。

65 「かつおぎ」24、大阪國學院通信教育部同窓会会報、平成二十年十二月

「式年遷宮システム」を支える「常若」の精神

(高城治延少宮司)

D\*神宮は二十一年に一度造り替えることによって常に若返り、「常若」の精神で作られた遷宮の制度は不滅である(中略)。(寺井種伯・大阪府神社庁長)

D\*大本は御遷宮と常若に繋がりが、常に若々しく、そして生成発展して行くという意味でしょうか。(中略)常若の生命観は、今の世も次の世も生き生きと若々しく生き通したい、命は永遠であるという願いが込められているのではないかと。

(宮田修・元NHKアナウンサー・神職)

D\*これまでのお話で、「常若」という言葉、思想がとても大

事なことがわかりました。いつも明るく若々しいこと。

66 坂本隆徳（熊本県神社庁副庁長）「式年遷宮について」『熊本県神社庁庁報』平成二十年

C\* 神道の中でよく使われる言葉の中に「常若」という言葉がございます。読んで字の如く常に若々しいという意味です。神様は非常に清浄を好まれます。（中略）その最も究極の世紀の大祭典がこの神宮式年遷宮とお考え下さいませ。

【平成二十一年】

67 神社本庁「伊勢の神宮 まほろば特別号」平成二十一年一月

\* 御遷宮1300年生きつづける「常若」の心  
（高城治延少宮司）

B・J\* そのときになぜ、あえて掘立柱や萱葺の屋根にしたのかといえ、やはり二十一年に一度すべてを新しくすることによって、神さまの御神威のさらなる若返りを願うことにあつたんです。まさに「常若」（とこわか）、つねに若々しく、みずみずしいことを願う心がそこに息づいているのです。これは大変な英知だと思いますよ。

68 「るるぶ伊勢志摩10」JTBパブリッシング、平成二十一年四月

D\* 常若の聖地・伊勢神宮のお参り

69 「とこわか森」絵本、平成二十一年七月

D\* とこわかとは、若返りながら続くことで永遠をいう。

70 伊勢志摩キャンペーン実行委員会「伊勢志摩美し国、まいろうオフィシャルガイドブック」平成二十一年八月

Ba\* 歳を重ねながらも、繰り返し再生することで、若々しいままに「永遠」をめざすーそんな神宮の「常若」の思想を象徴しているのが式年遷宮なのです。

71 「伊勢神宮のお正月ー伊勢の人はこの日が終わるまで新米を口にしない？」『みんなの経済新聞ネットワーク』伊勢志摩経済新聞、平成二十一年十月十四日

\* 「神嘗祭」は、その年に取れた新穀を神様に奉り、五穀の豊穰、国民の平安を祈願する祭典で、神嘗祭が20回の時を刻むと「大神嘗祭」となり「式年遷宮」と呼ぶ。

72 服部憲明「宮司メッセージ」124号、<http://www.iwazutenjin.or.jp/archives/index.html>、平成二十一年十一月一日

A\* 常若のいのり（中略）伊勢の神宮の御社殿を二十年ごとに改め造り、神さまに新宮にお遷り頂くことで、国の魂を生まれ変わらせることが出来る。それによって国家は若返り、皇室も国民も平安に、そして永遠に栄えることを目指そうとしました。これを「常若・とこわか」と申して、いつも若々しく、永遠に続いていくことを意味しています。日本民族の祖先は稲作の体験から、生まれ変わって永遠に、常に若々しく生き続ける思想、常若の祈りを持ち続けて参りました。

【平成二十一年】

73 浄見譲（福岡・宮地嶽神社宮司）「己の道」『神社新報』平成二十二年一月十一日

C\* 二十年ごとに蘇る御社殿、そして「常若」の心が、日本民族の基本を成すものだと思う。「常若」とは意味深く種々あるうが、私は「常若」とは魂の再生であり、穢れた魂を払う清め、新しい神を戴くことで、神道信仰の源流は、この常若に根差した魂の再生なのであると思う。そこで、再生を具現化させた行為が、ケジメであり、禊、祓いでケジメをつけ、高潔なる心身を養うことに通じるのであろうと思う。それは単に精神面だけのことではなく、日本人の日々の生活そのものが常

若であらう。

74 橋本政宣(福井・舟津神社宮司)「伊勢神宮の式年遷宮は二十年一度の大御嘗祭」『お舟津さん』12、平成二十二年四月

※\*二十年に一度、宮処(御敷き地)を改め、古例のままに御社殿や御神宝を初め一切を一新し、大御神の新殿へのお遷り(遷御)を仰ぐ式年遷宮は、神嘗祭の日に行なわれ、むしろ二十年一度の大御嘗祭というべきものである。神宮造宮のための遷宮とのみ見られがちであるが、神嘗祭のうちで二十年一度に造宮を行なうて神嘗祭を行なうというのが本義ともいえる。

75 『講談社ムック 伊勢神宮参宮公式ガイドブック』講談社、平成二十二年五月

C\*式年遷宮を20年に一度行う理由については諸説ある。(中略)「常若」という神道の考え方が根底にあるとされる。常に若いとは年齢ではなく、常に瑞々しいことを意味する。神様には常に清浄な社殿に鎮まっていたら、若々しい力で私たちをお守りいただきたいという願いだ。新しい宇治橋を渡った時に感じたのは、新しいだけではなく常に若々しい「常若」の力に違いない。日本人は伊勢神宮にまいり、この「常若」の力をいただいた。それこそが式年遷宮を繰り返す永遠の聖地の力なのだ。

76 千種清美(執筆業・皇學館大学非常勤講師)『永遠の聖地 伊勢神宮—2013年、式年遷宮へ—』ウェッジ、平成二十二年

八月

D\*キーワードは、常若2100年間、瑞々しくあり続ける聖地の物語。(帯)

D\*清々しい気が漂う境内に参拝すると誰しもリフレッシュされて新たな力が湧いてきます。それは、式年遷宮によって蓄え

られた「常若」の力をいただいているからです。

C\*二十年に一度、社殿を新しく造営し、神さまにお引越しいただくことを繰り返す式年遷宮によって、神宮は滅びることなく永久に聖地であり続けるというのです。(中略)そんな中であつて、式年遷宮の精神を表す「常若」という神道の考え方(中略)。

D\*常にみずみずしい社殿に神さまに鎮まっていたらという「常若」の精神は、今の世に大きな示唆を与えてくれています。

77 鶴飼隆(大阪國學院かつおぎ会会長)「財団設立百周年にあはせ遷宮に学ぶ勉強会を発足」『神社新報』平成二十二年十月四日

D\*鶴飼会長は、日本の歴史を貫く生成発展の原理として、常に若々しくあらうとする「常若」の精神の存在を指摘。「混沌を深める現代社会にこそ、この精神が求められてある」と述べ、「常若」の精神の精華としての遷宮について学ぶ今回の講演会の意義を強調した。

78 日本建築学会、ホームページ、平成二十二年十月頃

C\*神宮司庁宮繕部の技師である岡本健氏の(中略)解説によると、神道では「浄明正直(清く明るくうるわしい心)」を大切に、「常若」という考えにもとづき、常に若々しく元気でありたいと願う。遷宮により、日本の国が若くよみがえり、みずみずしい精神を保ち発展し続けるようという祈りがあるからだそうである。

79 「一生に一度はお伊勢さん」ホームページ、平成二十二年十月頃

D\*古くなる前に新しい社殿の造営を行う式年遷宮は、「常若(とこわか)」という神道の考え方を根底に持ちます。いつも

若々しいこと、いつまでも若いさまを「常若」といいますが、神様にいつも清浄な社殿に鎮まっていたたくことで、若々しくて大いなる力を備えてほしいという願いがあるのです。建物の老朽化というハード面だけでなく、常若の精神というソフト面も遷宮を必要としているのです。

【平成二十三年】

80 『月刊致知』平成二十三年一月号

Ba \* 伊勢神宮を表す言葉のひとつに「常若（とこわか）」がある。常若とは、常に若々しいということだが、これは式年遷宮という神事によっても継承されている。

81 ブログ大祓の国「様々な物・現象に神を見た日本人」平成二十三年一月十二日、[http://66575633atweby.info/201101/article\\_9.html](http://66575633atweby.info/201101/article_9.html)

C \* むしろ、神道のように、全ての物・事に神性を見て、それを大事にしようとする信仰にこそ、21世紀を切り開く大きな力があると思います。神道は、2000年前後という長きにわたって、殆どと言つていいほど色あせずに来ました。それは、神道には信仰の息吹が常に吹き込んでいるからで、それは、全ての物・事に内在する神性を大切にしてきたからだだと思います。これは、式年遷宮の「常若」の思想に通じます。

82 鷹司尚武（神宮大宮司）「新春鼎談」『広報いせ』平成二十三年

一月↓「瑞垣」218、平成二十三年三月

Ba・J \* 神宮にはいつも瑞々しく永遠に若いことを願う「常若」という言葉がありますが、これが遷宮が目指す理念ではないでしょうか。神宮は今も生きていて、遺跡ではないんです。

\* わたしは、神宮は古くて新しいといわれているようですが、「あるがままを受け入れていく」「駄目なときは変えていく」と

いう古人の知恵をむしろ大切にしているのだと思います。長い神宮の歴史の中で先人たちは時代の変化に柔軟なんですね。「変わり続けているから変わらないでいられる。」これが伝統だ。

83 「伊勢神宮と常若（とこわか）」<http://tenzanizane.jp/blog/entry/2277271>、平成二十三年五月九日

D \* 式年遷宮の尊き伝統は、常若（とこわか）をその源泉としているのです。これは素晴らしい概念で、そもそも常に新しい、常に若々しい、と言う、日本ならではの思想、というか、習慣、当然の観念（中略）そのもの、であります。

84 矢野高陽「神宮だより二つの宮処」『神社新報』平成二十三年八月二十九日

Ba・J \* 伊勢の神宮の社殿は式年遷宮によって二十年に一度新たに建て替えられる。（中略）この制度により、神宮は何時の時代も常に若々しい。

85 三橋健（國學院大學教授）監修『図解 神宮と出雲大社』P

HP 研究所、平成二十三年九月

C・B・A \* では、どうして決まった年（式年）にお宮を新調し、神座を遷すのだろうか？これは神道に見られる、きわめて重要な常若の思想によるものと考えられる。神さまに常に若々しく元気でいてもらうには、ケガレがなく、新鮮な環境を用意してお祭りする必要がある。このような思想から、天照大御神を祠に祭っていたであろう原始の伊勢神宮では、一年に一度新しい宮を建立していたものと考えられる。しかし大きく立派な社殿が神宮を構成するようになると、毎年新しくするわけにもいかず、式年制がとられるにいたつたのだろう。天照大御神の常若は、日本の国魂の常若をも意味する。そのため、天照大御神の神威がよみがえることは、日本人の民族エネルギーの再生

にもつながったのである。

86 鷹司尚武「インタビュ」『伊勢人』160、平成二十三年十月

C・J\* 神道には「常若」という、神様は常に若々しくあっていたきたいという考えが貫かれています。

87 河合真如（神宮禰宜・神宮司庁広報室長）『伊勢神宮の智恵』永く続けるためのヒミツは常若（とこわか）にあり〜小学館、平成二十三年十二月

Ba・J\* 一章 常若の聖域 皇大神宮の歴史は二千年、豊受大神宮の歴史は、千五百年前にさかのぼります。しかし、そこにあるのは遺跡ではありません。古代様式を保ちながら、常に新しい神殿が現存するのです。この「古くて新しい」というパラドクスを解く鍵は、常若の思想です。

Ba・J\* 現にバルテノン神殿は廃墟となり、ピラミッドは風化するばかりです。けれども、神宮は二十年に一度、神殿を新造して神々を遷すという式年遷宮によって、常に若々しい姿を見せるのです。

D\* 伊勢神宮は滅びを求める無常の産物ではなく、永遠の存続を可能にする智恵の結晶であり、繰り返しの美字をもつ常若の象徴なのです。

#### 【平成二十四年】

88 茂木貞純（國學院大學教授）『知識ゼロからの伊勢神宮入門』

幻冬舎、平成二十四年一月

A\* 「式年遷宮がもたらす「常若」の心」 国の魂が常に瑞々しくあることを願う。未来永劫の常若を目指す（中略）一三〇〇年前の建築や調度・神宝などがそのまま現代に再現される（中略）。この行為により、国の魂は生まれ変わり、常しえに若々しく、未来永劫続いていきます。これを「常若」といいます。

す。もちろん、人々の心、神さまを懇ろに祭る心も蘇らせませす。

89 近鉄「式年遷宮NAVI 伊勢神宮まめ知識」ホームページ、平成二十四年一月三十日開設

※\* 式年遷宮とは毎年10月に行われる神嘗祭は、収穫したばかりの新穀を神さまに捧げて感謝する祭です。このとき神宮では器や敷物などを新しくして祭を行います。そこには新穀とともに瑞々しい力を得たいという願いが込められています。遷宮の意義もそれと同じ。遷宮とは神さまに新たな社殿にお遷りいただいたいて、新穀を捧げる大神嘗祭なのです。

Ba\* 伊勢神宮は式年遷宮で全てを造り替え、その美しさを保ち続けています。繰り返し再生することで、みずみずしいままに「永遠」をめざす。伊勢神宮の「常若」の精神を、式年遷宮は象徴しています。

Ba\* なぜ20年ということよりも、式年遷宮というものが20年に一度、ずつと繰り返されてきたという事実こそ、その重みがあるのではないのでしょうか。式年遷宮を目指すところは古くて新しい、つまり「常若」の精神です。常に若い気持ちで、明日に向かっていくことを伊勢神宮の神様は教えてくださっているのです。

90 渡邊毅（皇學館大学准教授）『まほろばシリーズ⑦伊勢の神宮のはなし〜子供たちに伝えたい式年遷宮』明成社、平成二十四年二月

C\* 遷宮にはどんな意味があるのですか？（中略）神道には「やがて世界には終わりがくる」という考え方はありません。あるのは常に若々しく、すがすがしくあるという「常若」の精神です。（中略）そして、その「はじめ」の姿を、代々継承していく。そうすることによって永遠に若々しい清々しい「常

若」の世界を祈りながら実現しようとしてきたのです。

91 御遷宮対策室（伊勢商工会議所内）『伊勢のお白石持』4、平成二十四年三月

B・A\*式年遷宮は、神宮の常若（とこわか）、つまり大御神の永久を祈り、さらなる御神徳と国の弥栄（いやさか）を願う神宮最大のお祭りです。

92 千種清美「甦る常若の国 伊勢神宮」『DREAMS76』7、F

DA機内誌、㈱フジドリームエアラインズ、平成二十四年三月  
D\*地元三重県に住まい、遷宮にちなんだ祭りや行事を取材してきた私にも疑問は尽きない。けれど、1300年統一してきた「式年遷宮」を目の当たりにすると、古くから日本人が伝えてきたような気持ちになる。そのひとつが、「常若」という聞き慣れないことばだった。

D\*20年に一度行うこと、新材を使うこと、二つの宮地に遷ることとは明記されているが、その理由については触れていない。そのため木造社殿の耐久性、造営の技術伝承など諸説いわれられてきたが、いま、注目されているのが「常若」という神道の考えだ。私も、神宮司庁広報室の河合真如室長に初めて教わった。「常若」とは、年齢的なことではなく、常に若々しいこと。神様に常にみずみずしい社殿にお鎮まりいただき、その大いなる力に感謝しながら清々しく生きていこうというものなのです。

D\*常にみずみずしくあること。ふるいものにわびさびという美意識を持つ一方で、新しいものを尊ぶ。「常若」とは日本人なら誰しも持つ心ではないだろうか。

93 矢野憲一「式年遷宮とは 第三回 「伊勢神宮は宇宙遺産なのです」『WAGO』和合一 神社と「和」の幸せ情報誌」3、㈱偶庵、平成二十四年三月

D・A・J\*式年遷宮のこころ式年遷宮を私は、「常若（とこわか）」という言葉で説明しています。この言葉は、平安時代の遷宮の関係の書物に出てきます。（中略）常に若いとは、年齢ではなく、常に若々しく、瑞々しいことを意味しています。古いものを新しくすることで、永遠に若々しく、瑞々しくあり続けることを願った、日本人独特の文化を象徴しているともいえます。（中略）式年遷宮は、二十年ごとに、その国の魂を生まれ変わらせることによつて、国家が若返り、常に魂を若々しくすることになります。いつも若々しく、「常若」なのです。国の魂をフレッシュすれば、わが国は若々しく、いよいよ栄える。「弥栄（いやさか）」にもなります。

D・J\*式年遷宮は、われわれ民族の祖先が実際に体験してきた、生まれ変わらせて永久に、「常若」に生き続かせてゆく稲作の思想から来ていると思います。そして、「生まれ変わり」ではあるのですが、死んで蘇るものではありません。いったん死んで復活するという、西洋の「神の死」とは根本から異なります。D・J\*二十年毎に、社殿を建て替え、御装束や神宝も一新する式年遷宮。本当に素晴らしい、凄いいシステムだと思います。常に若々しく、瑞々しくあれ。そういった永遠の祈りなのです。

94 「るるぶ情報版 伊勢志摩13」JTBパブリッシング、平成二十四年三月

Ba\*くり返されることによつて神様のすまいがつねに「常若」の状態を保たれる（中略）。

95 「せんごう館 ホームページ」<http://www.sengukan.jp/wp-content/themes/sengukan/exhibition.php>、平成二十四年四月  
A・J\*永遠の匠たち（2）神宮式年遷宮における「社殿造営」は、殿舎の損傷の程度が問題ではなく、新しく建て替えて、

国の若返りと常若を祈り願って行われます。

96 「永遠に美しい日本の聖地「神宮」(中)「常若」(とこわか)」  
<http://blogs.yahoo.co.jp/meiniac/44635471.html> 平成二十四  
年六月六日

※・B a \*式年遷宮とは、20年に一度、神様に新しい社殿にお  
遷りいただき、神のみずみずしい力のよみがえりを祈る神宮最  
大・最重要の神事で、「大神嘗祭」とも呼ばれます。神宮の社  
殿は、掘立柱に萱の屋根という素朴な檜の素木造り。歳月を重  
ねると傷んでいきます。そこで、式年遷宮によってすべてを造  
り替え、その美しさを保ち続けてきたのです。繰り返し再生す  
ることで、いつも変わらない姿で、みずみずしいままに「永  
遠」をめざす—そんな神宮の「常若」の思い、祈りは先人の英  
知を式年遷宮は象徴しています。

97 田中恒清(神社本庁総長)「伝統宗教シンポジウム「宗教と  
環境—自然との共生」パネルディスカッション」、『宗教新聞』  
平成二十四年七月二十日

D \*伊勢神宮の式年遷宮は、(中略)社殿や神宝類を新しく造  
り替え、神にお遷りいただく行事で、その思想が常若(とこわ  
か)である。常若には、常に瑞々しく、若々しいことが人の生  
きる力になるとの考えがある。

98 中川知博(中川会計)「常若の国—日本」平成二十四年七月二  
十三日、<http://coffee-break.blog.ne.jp/default/2012/07/>

C \*なぜ20年に一度なのか探ってみます。その一つは耐久性  
です(中略)日本の神は、常に新しい生命を付与していくのだ  
から、神殿の汚損は見苦しいものです。その限度が20年だった  
のでしょう。もう一つは、造営する側の技術の伝承です。

神道には、「常若(とこわか)」という考え方があります。神

のお住まいは、常に若々しく、気持ちよく新しくしておきたい  
という思いが、色濃く影響しているのです。(中略)太古の日  
本人は、この式年遷宮を通じて、神様に若返っていたいて、  
清らかな。光。と力強い神のエネルギーをいただき、よりすば  
らしい時代を迎えられるように祈りを込めたのではないでしょ  
うか。加えて、日本という国がいつまでも若々しく、永遠に発  
展していくようにとの願いを込めて、20年ごとに立て替え、新  
しい息吹を吹き込んだきた、日本民族の知恵とその精神の素晴  
らしさがここにあります。

99 神社本庁「神社広報 まほろば」50、平成二十四年八月

D \*そもそも神宮ではなぜ造り替えを行うのであろうか。第一  
回神宮式年遷宮が行われた頃、日本には既に世界最古の木造建  
築法隆寺を建設する技術があった。ところが同じ技術で社殿を  
建てる道を敢えて選んでいない。つまり、そこには堅牢な建築  
物を残すこととは異なる思想が存在すると考えられる。それは、  
一つの世代が、次の世代へと精神や技術を確実に伝承し続ける  
ことでこそ永遠性が生れるという思想で、神宮式年遷宮には社  
殿のみならず、精神に至るまで常に若々しく生き続けるという  
思想が内在しているのだ。世界中には素晴らしい遺跡が数多く  
存在する。しかし、伊勢の神宮が世界中から注目される理由は、  
長い歴史をもちながら、遺跡ではなく、過去から今なお若々し  
く行き続けていることにある。

100 樺田弘一(一般財団法人日本研究所代表理事)『とこしえの神  
道』日本研究所、平成二十四年九月

C \*常若の心、神道には、「常若」と呼ばれる考え方がありま  
す。それは、すべてのものを常に若く、清らかな状態に保つて  
おくことである。そのためには、物ごとを一か所に止めたりせ

ず、また心を躰ませずに、常に循環させておく必要がある。その考え方を体現するのが「大祓」でありますが、もつとも最たる祭りは、伊勢神宮の式年遷宮である。

D\*このように「常若」の心を体現する神宮の式年遷宮は、神道の徳目である「明き清きまことの心」を保つためには、ものごとを止めたり、心を躰ませたりせずに、すべてを永遠に循環させる必要があることを私たちに教えてくれています。

101 「三重テレビブログ」99、<http://bgmnetv.com/item.php?id=1623>、平成二十四年十月一日

Ba\*なぜ20年に1度かはいろいろな理由がありますが、神宮には「常若」という思想があり、神様には常に若々しいエネルギーに満ちている状態にいたただくということもあるようです。

102 神嘗祭奉祝委員会「報道関係各位へ事前告知、及び、当日取材のお願い」『神嘗奉祝祭』東京PRオフィス、平成二十四年十月

※\*神嘗祭は伊勢神宮で年間1500余りあるお祭りの中でも最も重要とされる祭儀です。この神嘗祭が20回の時を刻むと「大神嘗祭」となり平成25年に控えた「式年遷宮」へと繋がっていきます。

103 JR東海「広告ポスター」平成二十四年十一月初  
A\*式年遷宮（中略）のすべてを新しくし、国の若返りを祈念する大祭。

104 「2013年、同時に遷宮、刷新で得る永遠 伊勢神宮出雲大社」日本経済新聞、平成二十四年十一月十七日

D・J\*河合真如・式年遷宮広報本部副本部長は、古来の「常若（とこわか）の思想」を強調する。常に神の勢いがみずみず

しく、生き生きとしたものであってほしいという信仰の表れである。

105 「晋遊舎ムック 歴史探訪シリーズ 聖なる神社―神話と神社の謎を解く」晋遊舎、平成二十四年十一月

D\*それではなぜ、式年遷宮は行われるのだろうか。それには諸説あるが、神の住む宮殿は清々しくなければならず、この祭儀をまっとうすることによって国の魂も若返り、常に清新さを保てるようにという願いが込められていると思われる。いつも清々しいことを常若という。

106 千種清美「伊勢神宮 常若の聖地」ウェッジ、平成二十四年十一月二十日

「日本人にとって神さまとは―河合真如神宮司庁広報室長に聞く」（二十四年七月）

\*「常若の思想」が生み出すもの（千種清美）

Ba\*以来、中断はあるものの二三〇年にわたり続いてきました。そこには、「常若」という思想があると、私は河合さんから教わりました。常に若々しく瑞々しくあり続ける「常若」を一つの物の見方、思想として考えられるようになったのはどうしてですか。

（河合真如）

Ba・J\*「常若」という言葉は、これまでも使われてきましたが、「常若の思想」として紹介したのは私からだと思いましたが、「常若の思想」として紹介したのは私からだと、神宮の美しい常緑の杜も、そこには木々に新陳代謝があります。たとえ常緑樹であっても、木は芽吹き、葉を茂らせ、そして落葉し、その後からまた新しく芽吹く、その繰り返して、常に緑の森が維持さ

れているわけです。常緑の森だけではありません。人の命もまた繰り返しているからこそ、連続とつながっています。

(田中恆清神社本庁総長)

A \*式年遷宮は、日本国が常に若々しい「常若」の精神で、皇室を敬慕し、国家と国民が一体となって誇りある歴史や伝統を守り継承していくための国家の祈りなのである。

107 茂木貞純・前田孝和『遷宮をめぐる歴史―全六十二回の式年遷宮を語る』明成社、平成二十四年十一月二十三日

(茂木貞純・再版に寄せて)

A \*式年遷宮は、二十年に一度、新しい御殿を造り、神宝装束を古式のままに造替して、大御神に新殿に遷っていたたく、我が国にとって第一の重事であり、神宮無双の大典とされてきた。そのことにより、大御神の神威がよみがえり、国の命が若返る―とされる。常若の心である。

108 「遷宮に秘められた「霊的再生」の謎」『ム』学研パブリッシング、平成二十四年十二月八日

D \*つまり遷宮による社殿の新造によってケガレ(気枯れ)を祓い、霊的なパワーの再生をはかるのである。

B \*遷宮を行うことによってその神体が生まれ変わり、いつまでもそのハレ(常若)パワーを保ちつづけることが可能となる。

109 「旅の手帖」交通新聞社、平成二十四年十二月十日

D \*遷宮の根底にある。常若「神道の精神」。常若とは、つねに若々しくみずみずしいこと。耐久性が高いとはいえない素木造りの社殿は、20年に一度建て替えられることにより、永遠に若々しい姿であり続ける。神様には常に清浄な社殿に座し、若々しい力で国をお守りいただきたい、そんな願いが遷宮の根底にはある。

110 千種清美「伊勢の御遷宮はなぜ二十年に一度行われるのか」、矢野憲一・五十鈴塾編『三重県謎解き散歩』平成二十四年十二月十三日、新人物文庫、新人物往来社

C \*その根底には「常若」という神道の考え方がありとされている。常若とは常に若々しいこと。年齢的な若さではなく、常に若々しいことをいうが、神さまに常に瑞々しい社殿に鎮まっていただき、その大いなる力で私たちを守っていただいているのが、式年遷宮を今に伝えてきた精神的支柱ではないかという。111 粟生明(建築家)「せんぐう館」の設計にかかわって」『瑞垣』

223、平成二十四年十二月二十日

D \*「常若」と呼ばれ、つねに瑞々しく建築や事物が生まれ変わるということとは、建築を「命あるもの」と定め、(中略)。

112 「プログ Pepper☆illy の茶飯的日常」<http://ameblo.jp/pepperily/8-08/entry-11414812196.html#main>、平成二十四年十二月

B a \*常若の、伊勢神宮

B \*常若。つねに生まれ変わる事。若くなること。この式年遷宮という目に見える形で、それを体現し、人もそうあることができること示すこと。神々を新たにお迎えすることで、神も人も常に若くあること。この伝統はそれを私に示す。この伝統の美しさと心映えに、私ばかりでなく、ここに来た日本人はだれでもそれを誇りに思うだろう。

113 高橋天山(日本画家)「プログ」<http://zenzansho.jp/category/20196601.html>、平成二十四年十一月

D \*これまでも、春の院展出品作品【倭姫命】をご奉納させていただきましたし、神宮の成り立ちと、常若の精神にかかった一連の作品を神宮徴古館に奉納させていただきたい思いをか

なえていただいております。

114 『TimesSpace 宇治山田フロアガイド』リーフレット、平成二十四年十二月

D\* 神様に新宮にお遷りいただき、神のみずみずしい力のよみがえりを祈る、伊勢神宮最大・最重要の神事「式年遷宮」。(中略) 20年に一度の神事は、いつまでも若々しい姿で永遠をめざす「常若」の精神を象徴しています。

【平成二十五年】

115 彬子女王(三笠宮家)「60年に一度の風景」『和楽』小学館、平成二十五年一月・二月号

C\* 御遷宮が行われる理由をはつきりとはわかっていない。(中略) いつも清浄で新しいものをよしとする神道の常若の思想から、時期を定めて社殿を新しくして、清々しい場所に神様にお遷りいただく、など様々な説がある。

116 河合真如「式年遷宮を知るとは、即ち日本文化の根源を探ること」『和楽』小学館、平成二十五年一月・二月号

Ba・J\* この遷宮というひとつの祭りを考える際に、キーワードとなる言葉が「常若」です。この常若という思想こそが、神宮の在り方、さらには、遷宮の意義そのものを捉えていると言えるでしょう。常に若々しく、瑞々しくある状態を常若といいますが、そうあるためには、日々の行いのひとつひとつが正しく重ねられていかなければなりません。日々、年々の神事、神への感謝の祈りが重ねられることによって、過去と未来が連なり、永遠性が生れてくるのです。

D・J\* 神宮で言えば、毎日のさまざまな祭りを続けていくことが大事であり、それが20年に一度の大祭へと繋がっていくのです。この日々の祈りを継続することこそが、過去と現在を繋

ぎ、現在がさらに未来に繋がるといふ「常若」の思想を現実のものとしてくれるのです。常若の思想を意識するということは、常に自分の立ち位置をしつかりと見据えることだと思えます。人が生きていく上で、これはとても重要な要素だと思います。Ba・J\* こうした日々の連続性を大事にするからこそ、伊勢の神宮は永遠に若さを保ち続ける「常若の聖域」として現在まで保たれてきたのです。

D・J\* 永遠に受け継がれる常若の思想

117 「常若の聖域」『和楽』小学館、平成二十五年一月・二月号

Ba\* 「アントニン・レーモンド 伊勢の深い森のなかに世界で一番古くて新しいものが存在する(中略) 神宮は、古代の様式はそのままに20年に一度、木造の神殿を新築する遷宮によって常に若々しい姿を見せている」。この言葉は、神宮に根ざした「常若」の思想を正確に言い当てている。

D\* (写真説明) 由貴夕大御饌と、奉仕する神職の心身の穢れを祓う修祓の儀式の様子。平安時代の姿そのままに行われる神事にも「常若」の思想を垣間見ることが出来る。

118 『TOWNMOOK 日本一の聖地美しい! 伊勢神宮いま、式年遷宮と「神々の二千年物語」』徳間書店、平成二十五年一月一日

D\* 霊妙なる「式年遷宮」日本人が追求してきた「常若」というテーマ

D\* このように遷宮の歴史は古いが、脈々と受け継がれてきた遷宮から、古代日本人の価値観を推察することもできる。それは「常若」というテーマである。

Ba\* つまり、遷宮祭は伊勢神宮が二十年に一度若返るといふ意味が込められているのだ。

119 山本行恭(三重・椿大神社宮司)「謹賀新年」『椿の宮』36、平

成二十五年一月一日

D \* 中今の誠心を貫き徹すことを根に据えた「貫」を受け、愈々本当の姿を世界に示す時を迎える今年は、生命の甦りとも伝えられる常若の理想を求めたご遷宮により、怖じることなき主役を演ずる絶好の年となります。

120 『入門日本の神社 洋泉社ムック』洋泉社、平成二十五年一月五日

D \* 式年遷宮は、「若返り」の物語である。

D・B \* 日本古来の常若思想が生んだ遷宮という霊威再生システム（中略）伊勢神宮の遷宮サイクルが二〇年になった理由を導きだすのは容易ではないが、ひとつ重要なのは、古来、遷宮が「常若」の思想に裏打ちされていることである。

B \* 伊勢神宮の祭神・天照大御神は太陽にたとえられる神であり、すべての生命の源である太陽という大自然の運行に根ざした信仰において「永遠」は大切なキーワードとなる。永遠はつねに更新され続けることによって約束されるものであり、神の霊威もまた遷宮を繰り返すことで、つねにリフレッシュされる信じられたに違いない。

B \* つまり遷宮とは、神のパワーをつねにみずみずしく、エネルギーに保つために欠かせない儀式なのである。（中略）すなわち、二〇年おきに繰り返される伊勢神宮の遷宮は、神の息吹そのものにはかならない。

D \* すべてを一新し、「常若」の心を継承（中略）その（御装束）すべてが「常若」の心を継承しつつ、新しく調進されるのである。

D・B \* 受け継がれる「常若」の精神 常に若々しくあることを「常若」という。同じく天照大御神の魂が常に瑞々しくある

ことを願って行われるのが式年遷宮なのである。

121 加藤隆久（兵庫・生田神社宮司）「遷宮とお白石持ち」『むすび』生田神社社報、平成二十五年一月九日

\* 遷宮とは『大神嘗祭』のことであり、遷宮によって日本の国が若返る、生命の甦りを意味します。国民のすべてが、はつらつとした生命源に立ち返って、みずみずしい若さを取りもどし、永遠の発展をとげることが遷宮であり、ここに意義があると思います。

122 「常若―太古の日本が息づく宮」『別冊宝島1938号 日本人の魂のルーツを知る―20年に一度の遷宮伊勢神宮のすべて』宝島社、平成二十五年一月十四日

B a \* 伊勢の神宮に息づく精神の一つに常若の思想がある。常若とは、常に新しく若々しい様子のことを指す。この思想を支えるのが、日本最大の祭り・式年遷宮である。

123 矢野憲一「伊勢神宮は宇宙遺産なのです」『別冊宝島1938号 日本人の魂のルーツを知る―20年に一度の遷宮伊勢神宮のすべて』宝島社、平成二十五年一月十四日↓87と同文。

124 新谷尚紀（國學院大學教授）「遷宮とはなにか。」『Harakoi』1033、―2013伊勢、出雲が新たになる！聖地、マガジンハウス、平成二十五年一月

D \* 根底にあるのは常若を尊ぶ心。甦えること常に新鮮な生命力に満ちていることを求める日本独特の文化があります。すべて20年ごとに更新されることで、いつまでも新しいすがすがしい姿を得ることによって神さまも永遠に若々しく照り輝く存在であり続ける存在であり続けられるというわけである。

125 高城治延「悠久の祭りのために移ろう時代に敢然と向き合う（インタビュー）」『伊勢人』261、平成二十五年二月一日

B\*私は、常若 というのが遷宮の一番最初の精神であつたと思うのです。神様に更に若返っていただき、御力を高めていただく。そのために練り返されるのが遷宮だと思えます。

126 吉川竜美（神宮権禰宜・神宮司庁広報課長）「神代と今をつなぐ〈聞く〉」『伊勢人』261、平成二十五年二月一日

B・C\*—それは、何のために行われるのですか—（中略）耐久年数という意味からも一定期間に建て替えの必要があるわけですが、遷宮は単に社殿や神宝の造替というだけでなく、新宮をご用意して、そこに神さまにお遷りいただくことによつて、ご神威が更新されるわけです。その背景にあるのは「常若」※と呼ばれる思想で、突き詰めて言えば遷宮の目的はここにありま

※「常若」いつまでも瑞々しく若々しい状態を表す詞。すべてのものに魂が宿ると考える神道では、その魂がリフレッシユされることにより、その主体は何度でもエネルギーがあふれる状態になると考える。

D\*つまり、遷御によつて、何度でも、天照大神はこの伊勢の地に降臨され、新たにご神威を發揮される—先にお話した「常若」につながるものですね。遷御の祭列は、神の示現を仰ぐものであり、それによつて神代が現在にのみがえり、未来へと続くのです。神道では過去・現在・未来は一貫するものと考え、現在を最も大切な瞬間、神代を継承している「今」と捉えるのです。神道では「神代今にあり」とか「中今（なかいま）」といひます。

127 『Gakken Mook なるほど伊勢神宮と出雲大社のすべて』三橋健監修、学研パブリッシング、平成二十五年二月九日  
D\*これが「遷宮」1300年以上続き、62回を迎える伊勢

神宮の式年遷宮。昭和28年から60年ぶりとなる出雲大社の平成の大遷宮。いずれも今年、平成25年にとり行われる大きなお祭りだ。遷宮とは何か？ひと言でいえば、窮まることなく永遠に、常に若々しく、すがすがしくあるという「常若」の精神を形に表わしたものだ。社殿や御装束、神宝を新しく作り直し、神々を迎え入れることで再生の営みが行われ、国家繁栄、ひいては個人の幸せへとつながっていくとされる。

D\*おはらい町も常若の町（中略）神宮の森が昔と変わらず、しかしお宮は常に生まれ変わっているように、門前町も根っこは変わらず、しかし日々生まれ変わっている。おはらい町もまさに「常若」の町だ。

128 『神社検定 公式テキスト④遷宮のつぼ』日本文化興隆財団企画、扶桑社発行、平成二十五年二月二十日↑再掲載『フクハウ

チ伊勢』扶桑社ムック、神宮司庁監修、平成二十一年十一月

129 吉川竜美「神宮式年遷宮の意義」『神社検定 公式テキスト④

遷宮のつぼ』日本文化興隆財団企画、扶桑社発行、平成二十五年二月二十日

D・J\*また、すべての説「なぜ二十年か」に常に瑞々しく清らかであることを重んじる「常若」の思想と、原点帰帰の信仰が看取できるのは有意義であるといえよう。

130 河合真如「永遠の今」『神社検定 公式テキスト④遷宮のつぼ』

日本文化興隆財団企画、扶桑社発行、平成二十五年二月二十日  
D・J\*常に若々しく瑞々しい神宮は、常若の象徴でもある。永遠に式年遷宮が繰り返されることは、精神と技術と環境が保たれている証。

131 「伊勢神宮と技術継承」ピアズ・マネジメント(株)平成二十五年二月二十五日、[www.peers-management.com/](http://www.peers-management.com/)

D\*どのような経緯と目的で20年ごとの式年遷宮が制定されたのかは諸説ありますが、様々な視点から見ると、非常にうまくできた仕組みであることがわかります。もちろん、神道として神様を常若(とこわか)にお祀りするというのが、第一でしょう。しかし、日本の思想の真髄は、それらを生活や文化に溶け込ませることで、長く、強く生き残る点にあると個人的には思っています。

132 河合真如「式年遷宮の意義」『宗教と現代がわかる本2013』

平凡社、平成二十五年三月八日

D・J\*神と共に生きるために繰り返し、日々、年々、式年の祭りをつづける神宮。そこには、永遠の若々しさを願う常若の思想が息づく。衣食住の恵みに究極の感謝を捧げる式年遷宮は、神宿る森を中核とする循環再生型文明のモデルといえよう。

133 ありむら治子(参議院議員)「お多賀さん」に想いを寄せて

『多賀』49、平成二十五年三月十五日

D\*この秋には、命のよみがえり、常若のお伊勢さま式年遷宮が齎行されます。

134 稲貴夫(神社本廳本宗奉賛部長・伊勢神宮式年遷宮広報本部事務局長)報告1「神宮の式年遷宮の概況と(常若)の理念」日本ナレッジ・マネジメント学会第16回年次大会、平成二十五年三月九日、<http://www.kmsj.org/archive/20130309photo.pdf>

特別講演『伊勢神宮の式年遷宮に学ぶ』(常若)の理念を社会に活かす

135 稲田美織(写真家、エッセイスト)、報告2「(常若)の理念を写し撮る」日本ナレッジ・マネジメント学会第16回年次大会、平成二十五年三月九日、<http://www.kmsj.org/archive/20130309photo.pdf> 特別講演『伊勢神宮の式年遷宮に

学ぶこと―(常若)の理念を社会に活かす

136 『ぴあMOOK お伊勢さんぽ』ぴあ(株)中部支社、平成二十五年三月二十日

D\*20年に一度の式年遷宮で伝えられるもの・こと(中略)神道には「常若」という精神がある。「常若」とは年齢が若いという意味ではなく、常に若々しく瑞々しいことを指す。神様のお住まいも身の回りの調度品もすべて新しくした瑞々しさの中で若々しい力を発揮していただこう、というわけだ。

C\*Qなぜ20年に1度なの? A「常若」という言葉を御存じだろうか。神道には「常若」という精神がある。「常若」とは年齢を指すのではなく、瑞々しさをいう。20年に1度、神様のお住まいも身の回りの調度品もすべて新しくすること、神様には清々しさの中で若々しいパワーを最大限に発揮していただくという願いを込めているといわれる。

137 武澤秀一(建築家)『伊勢神宮と天皇の謎』文春新書、平成二十五年三月二十日

C\*(常若)《中今》神道でよくいわれる言葉に、《常若》とか《中今》がある。《常若》とは文字のとおり、常に若々しく、清 newly 潑刺としていること。《中今》とは時のながれのなかで今、この瞬間が中心であり、永遠につながっているということ。

138 「遷宮へ向かう下鴨・上賀茂」『宗教新聞』平成二十五年三月二十日

D\*下鴨神社では再来年の春、正遷宮を行うが、根本には、祭神に常に清浄で若々しい社殿にいたたく「常若(とこわか)」の思想があると説明している。

139 吉川竜美「式年遷宮―常若の原点回帰の営み―」『院友会報』353、平成二十五年三月二十三日

D・J\*式年遷宮には、二つの重要な思考が通底している。一つ目は常に瑞々しく清々しい生命力溢れる状態を尊ぶ我が国の伝統的思考である「常若」の思考。

D・J\*「常若」と「原点回帰」の思考が内在する式年遷宮という世界に比類のない優れた制度が、神宮を生命(いのち)ある聖地として存在し続けることを可能ならしめている(中略)。

140 池田宏(東京国立博物館上席研究員)「神社の宝物と神道の美術」『国宝 大神社展』NHKプロモーション、平成二十五年四月九日

B\*神社のなかには、社殿や神宝が一定の期間を経て古くなると、それまでとまったく同様に新しく社殿を建て替えたり、神宝を新調する式年造替がおこなわれた社がある。これはもとの形のとおり建物や神宝を一新することで、祭神に新たな力を得、更新され、若返る、という考え方が指摘されている。そこにはいつまでも瑞々しく、変らない姿、常若の思想がうかがえる。

141 「皇室日記特別編 伊勢神宮式年遷宮」『日本テレビ放送網(株)、平成二十五年四月十日

一章 常若の神宮の式年遷宮繰り返し再生し、生まれ変わることで、新しい力を宿す

D\*悠久の時を超え、継続する常若の精神 式年遷宮は千三百年前に始まった二十年に一度の神事で、社殿や御装束神宝を新しくして、絶えず瑞々しさを保つものです。それは「常若」と呼ばれ、新しく作り直し継続することで、つねに若々しい状態であることです。常若の精神とは、繰り返し行われることのために、永遠性を見出すこと。(中略) 常若の精神が宿る神祕の森(中略)。

D\*「常若」(中略) 式年遷宮が意味するものとは?(中略)

その太陽の神さまとされる天照大御神に、新しく造り替えられた社殿で気持ちも新たに「常若」になっていたかどうかと、神宮の式年遷宮は続けられてきました。(中略) 式年遷宮では定期的に建物を造り直し、御装束神宝を新調することで、つねにすがすがしさを保ち、また技術を廃れさせることなく、未来へとつなげていく永続性を追求しています。これも「常若」の意義のひとつ。式年遷宮を繰り返すことで、永遠の「常若」をめざす(中略) 式年遷宮がなぜ二十年なのか、その理由は諸説ありますが、技術の伝承がその一つに挙げられています。二十代で見習い、四十代で熟練となり、六十代で後継に技術を伝えるというサイクル。二十年は、「常若」のための年月といえそうです。

B\*御装束神宝作りに込められた技術の伝承、常若の精神 新しい衣装をお供えし、神威を新たにする。

\*「各地の神社のなかには、式年遷宮の代わりに神座を新しくする祭りがありますが、神宮の神衣祭で新しい衣服を奉ることも同じ意義があります。新しい衣服を作り、それを捧げることで、神威がさらに強くなった大御神に蘇っていたたく(中略)、これが社殿をはじめすべての調度品を新しくする、神宮の式年遷宮につながっています」とは神職の方。

142 畑中章宏(多摩美術大学芸術研究所特別研究員)「神社に伝わる名宝の美」『一個人別冊 日本の神社の謎』KKベストセラーズ、平成二十五年四月十日

C\*今年伊勢神宮で第62回式年遷宮を迎える節目の年である。「常若」「みあれ(御生れ)」という言葉に象徴されるように、神道の美意識はつねに清らかで瑞々しいものである。

143 河合真如「『式年遷宮』とは何か」『サライ』25巻5号、平成二十五年四月十日

C・J\*神嘗祭では、神々から地上にもたらされた初穂をまず神様に捧げ、さらなる永遠を祈ります。このとき、神様に捧げる神饌を納める櫃やお祭りの道具類は、すべて一新されます。神道には「常若（とこわか）の思想」があり、これもそのひとつです。

144 矢野高陽「神宮だより 毎日の積み重ね」『神社新報』平成二十五年四月十五日

Ba・J\*森の中には常若の社殿が建ち、変はらぬ祈りが捧げられてゐる。

145 「常若」と「蘇り」伊勢神宮と出雲大社の遷宮」、朝日新聞デジタル、平成二十五年四月十五日号 <http://www.asahi.com/national/articles/OSK201304090149.html>

D\*「常に生き生きとしたみずみずしさを尊ぶ『常若の思想』に基づきます」と伊勢神宮は説明しています。

146 岡田芳幸「新刊紹介 遷宮のつば」『神社新報』平成二十五年四月二十二日

D\*神宮式年遷宮とは「常若」の思想である生命力の更新を祈る祭りである。

147 神道青年全国協議会『神主さんが教えたい伊勢神宮』電子書籍、平成二十五年四月

D\*神宮で20年に一度、建物の造り替え等を繰り返すということは、後世へ精神や技術を伝承し続けることにより永続性が生まれ、先人のところが若々しく生き続けるといふ「常若」の願いが込められているのです。

148 『旅の手帖 mini 伊勢神宮出雲大社』交通新聞社、平成二十

五年五月十五日

(千種清美)

D\*それではなぜ、人々は遷宮にやってくるのか。私は今回の遷宮で「常若」という言葉を知った。常に若々しい、みずみずしいという意味の神道の考え方だ。式年遷宮によって新しいお宮に鎮座された神様に、そのみずみずしく大いなる力で私たちを守ってもらおうという願いがあるからではないか。私たちは、新年になると神社へ初詣に行く。そして、古いお札やお守りなどを納め、代わりに新しいものをいただきたい。今年一年、無事に過ごしたいと思うからこそ、新年という節目に真新しい願いをかけ、新たなお札やお守りを授かってくれるわけだ。これまで気がつかなかったが、初詣も神様の「常若」の力をいただこうしていただけないだろうか。

D\*伊勢と出雲の神様が新しいお宮に遷る今年、「常若の聖地」へ、お参りされてはいかがだろうか。

149 河合真如「常若のふるさと」『別冊太陽 日本のこころ208 伊勢神宮 悠久の歴史と祭り』平凡社、平成二十五年五月十九日

Ba・J\*悠久の歴史をもちながら神宮が常に若々しい姿を保つのは、二十年に一度の式年遷宮による。(中略) 木々の芽吹きのように、常に若々しい神宮は、常若のふるさとであり、永遠に世界に誇りうる聖地なのである。

150 吉川竜美「式年遷宮―原点復帰への大いなる営み」『別冊太陽 日本のこころ208 伊勢神宮 悠久の歴史と祭り』平凡社、平成二十五年五月十九日

D・J\*すべての説「なぜ宮を遷すのか」の根底には、常に瑞々しく清らかであることを尊ぶ「常若」の思想と、「原点復帰」の信仰とが流れているのは重要である。遷宮に内在するこ

の「常若」の思想（中略）。

151 梶謙治（市谷八幡宮宮司）「出雲大社と大和の国造り」『宗教新聞』平成二十五年五月二十日

C \* 他にも決まった年に遷宮、いわゆる式年遷宮する神社は多く、定期的に建て替えることで新鮮さを保つことが、神道の常若（とこわか）の思想の表れとなっている。

152 「出雲大社「大遷宮」に見る日本人の心」『女性セブン』小学館、平成二十五年五月二十三日

D \* 遷宮が示す「常若」の精神（三橋健）

C \* 遷宮とは、永遠に、常に若々しくすがすがしくありたいと願う神道の「常若」という精神を形に表したものです。（中略）常に若々しく元気でありたいと願う神道の理念は、日本人の生活と密着したものです。遷宮の根底にも、そうした日本人の願いが込められているのです。

2013.05.28 Tuesday

153 丸田みどり（とこだま師）「常若の精神－伊勢神宮へ」<http://blog.kotonoha-hirarinet/?id=1162074>

D \* 遷宮は20年ごとに全てが初めになる。つまり古くて、しかし新しい常若に精神が生きているのです。

154 JTB中国四国商品企画販売部「奉祝特別企画 伊勢・鳥羽・志摩に行こう」パンフレット、平成二十五年五月、<http://d-stand.jp/obj/cjp/FDATA/book30710/index.html>

D \* 遷宮の真義は「常若（とこわか）」です。それは大御神様に常に若々しくいただき、「神徳を賜ることで国の弥栄（いやさか）」と、とうとう永遠の発展と民族の幸せを願うことにはかなりません。この儀式によって日本の国が常に若返り、日本人の

「魂の継承」がなされてきたといっても過言ではないでしょう。

155 神崎宣武（旅の文化研究所所長）「お伊勢参りは、日本人の旅の原点」、『せんぐう旅博』せんぐう旅博実行委員会、平成二十五年六月一日

D \* 伊勢に、遷宮をくりかえして「常若」の神宮がある。古くから私たち日本人は、その常若の神徳を「おかげ」として崇めてきた。

156 「第62回神宮式年遷宮 20年に一度の「式年遷宮」は「常若」の象徴」、『せんぐう旅博』せんぐう旅博実行委員会、平成二十五年六月一日

Ba \* 神宮には、美しいままに永遠をめざす、「常若」という思想があります。この「常若」を象徴するのが式年遷宮なので

157 奥田碩（出雲大社御遷宮奉賛会会長）「御挨拶」『幽蹟』出雲大社教務本庁、平成二十五年六月一日

\* この御遷宮の本義は大神様の更新、蘇りであり、その更新蘇生は御遷宮のお仕えを通して結ばれる人々、また共同体すべてに振り向けられ、その活力を戴くものであります。

158 上田正昭（京都大学名誉教授・古代史）コメント「歴史秘話ヒストリア 伊勢神宮－日本の始まりへの旅」NHK総合テレビ、平成二十五年六月五日放送

D \* 日本の神様はお祭りをしないと御神徳は衰えていくことという信仰がある。伊勢神宮はまさにそれで、永遠に若々しくあつてほしいという常若の精神が遷宮の信仰の根底にある。（ナレーション）「式年遷宮は定期的に宮を建て替え若々しい状態に保つ仕組み……」

159 「伊勢神宮の謎 式年遷宮を行うのはどんな理由から？」、岡

田明憲・古川順弘・吉田邦博『図解ふしぎで意外な神道』学研  
パブリッシング、平成二十五年六月十一日

C\* 祭神と社殿の常若を維持する（中略）これまで式年遷宮  
が継承されてきた理由は何か？ もっとも大きな理由として考  
えられるのは、定期的に新造することで、社殿および祭神がそ  
れまで蓄積されてきた国家レベルのケガレを祓い、再生するこ  
とであろう。神道では、これを常若という。

\* 社殿を新造することでケガレを祓い、常若を維持。

160 『魂の継承 第六十二回神宮式年遷宮お白石奉献』リーフレッ  
ト、第六十二回神宮式年遷宮お白石奉献本部、平成二十五年六  
月

※\* この毎年齋行される神嘗祭が二十回積み重ねられると、さ  
らに大々的に建物から装束、神宝類に至るまで一切を新たにす  
る式年遷宮となります。それゆえに二十年に一度の「大神嘗  
祭」とも称されるのです。

B\* 魂の継承・神宮式年遷宮（中略）二十年をひとつの区切  
りとして、神の常若を祈るとともに、この国の心を、姿をそれ  
ぞれの時代のなかに問い、確信し、千代八千代の弥栄を願うも  
のであり、……。

161 『今、なぜ神社なのか』WAGO・和合、神社と「和」の幸  
せ情報誌、8、(株)偶庵、平成二十五年七月一日

D\* 式年遷宮とは「常若（とこわか）」の精神に則り、社殿を  
新しく建て替える行事で、出雲大社は六十年ごとに、伊勢神宮  
は二十年ごとに行われています。これにより、過去から現在、  
そして未来へと、魂を、型を、精神を受け継いでいくのです。

162 青木康編（出版企画）『完全保存版 伊勢神宮のすべて』宝島  
社、平成二十五年七月五日

C\* 常若 太古の日本が息づく宮 伊勢の神宮に息づく精神の  
一つに常若の思想がある。常若とは、常に新しく若々しい様子  
のことを指す。この思想を支えるのが、日本最大の祭り・式年  
遷宮である。

163 田中恆清「神を感じる」『完全保存版 伊勢神宮のすべて』宝  
島社、平成二十五年七月五日

\* 「中今」の精神、（中略）神道の真髄、根本として、「中今」  
の思想があります。中今とは、過去・現在・未来にとらわれず、  
永遠の過去と未来の中間にある今、当世を最良の世として、今  
この瞬間を精一杯生きることが指します。

164 鎌田東二（京都大学こころの未来センター教授）「特集 神社  
と遷宮の謎Q&A」、『歴史街道』平成二十五年八月号、平成二  
十五年七月五日

D\* 遷宮をきっかけにして先祖たちが積み重ねてきた祀りの心  
を甦らせ、その心を次代につなぎ、もって永遠の若さを保つ。  
そんな「常若」の発想です。

165 錦田剛志「なぜ人々は出雲大社に魅せられるのか」、『デイスカ  
パー・ジャパン』平成二十五年八月号、樞出版社、平成二十五  
年七月五日

D\* 遷宮はまた、原初に帰ることで、よみがえり、永遠の若さ  
を持続することも捉えられます。

166 岡田登（皇學館大学文学部教授）「伊勢の式年遷宮を考える」、  
皇學館大学人文学会第6回大会シンポジウム・レジュメ、平成  
二十五年七月七日

D\* 式年遷宮の意義（伊勢は日々が常若…一年間の注連飾り↓  
毎日が元旦）過ぎた20年の天下泰平・五穀豊穰・子孫繁栄を、  
天照大神以下の神々に感謝して、殿社・神宝・装束を新たにし、

変わるこのこないこれからの20年を祈る。

167 圓藤恭久（徳島・大麻比古神社宮司、元神社本庁本宗奉賛部長）「新刊 別冊太陽―日本のこころ」208 伊勢神宮 悠久の歴史と祭り」「神社新報」平成二十五年七月八日

D \* 神宮式年遷宮は、（中略）その本義は、神威の更新累加で「国家無窮の弥栄を祈る」ことにある。二十年ごとに繰り返し御鎮座起源への回帰がなされ、祈りの心と技とは時代を超えて受け継がれ、まさに神話が今に息づく。そこには「清浄と常若」の思想と「原点回帰」の信仰とがある。

168 大野湊神社 社務日誌（ブログ）、平成二十五年七月九日、<http://oonaminato.or.jp/omamori/20130709/>

C \* 常若の精神 神社では「常若」（とこわか）というものを非常に大切にします。「常若」つまり「常に若々しい」「常に清々しい」という意味です。古来日本人は「清浄」というものを非常に意識していました。（中略）神社・神様も常に新たに、常に清らかだというものが求められています。伊勢神宮での20年に1度の式年遷宮もこの考え方から始まっています。お守りも同様に、日々汚れ、神様のお力が弱くなっています。そこで1年に1度は新しいお守りに変えていただき、常に若々しい神様のお力を頂いてください。

169 「時を紡いで 美しの国の宝 伊勢神宮式年遷宮の一三〇〇年の歴史と伝統」BSフジ、平成二十五年七月十六日放送

Ba \* 新しい宮に遷ること若々しい力を保つと考えていたのです。

Ba \* 神衣祭にも春秋に新しい御衣をお供えすることで神さまの若々しさを支える、式年遷宮の常若の精神が籠められています。

D \* 常若の精神を受け継ぎ、清らかな精神を伝える神宮……。

170 長野県神社庁神宮大麻暦頒布委員会「お白石持行事に参加される皆様へ 伊勢神宮「おふだ」について」印刷物、平成二十五年七月二十四日

C \* 毎年新しいお神札を受ける理由について 私達日本人は古くから、毎年多くのお米を実らせる稲穂と同じように、新年にお神札を戴く事で御神徳や生命を更新すると考えて来ましたが。常に新しくある事で、若々しいちからを保つという日本人の考え方によって、毎年神棚のお神札を新しくするので。神道では、この様な考え方を「常若（とこわか）」と申し、伊勢神宮でも同じ考え方にて二〇年に一度、社殿の全てを建て替える「式年遷宮」を行ない、繰り返し永遠を保持しているのです。私達も、この「常若」の精神に則り、（後略）。

171 乾淳子（元雑誌編集者）「式年遷宮の始まり」「お伊勢さんと遷宮」伊勢文化舎、平成二十五年七月三十一日

D \* 式年遷宮は、大神が常に見ずみずしくお力を発揮されるよう、常若（とこわか）への祈りを込めて行われる。

172 栗生明「過去と同時に未来を感じさせる神宮の建築」「お伊勢さんと遷宮」伊勢文化舎、平成二十五年七月三十一日

Ba \* ライフサイクルコストを計量せざるを得ない現代の建築において、これは一見、大きな矛盾を抱えたテーマでありそうではないかと思えます。

173 吉川竜美「神代と今をつなぐ―遷御の祭列が体現するもの―」「お伊勢さんと遷宮」伊勢文化舎、平成二十五年七月三十一日

C・J \* 遷宮は、単なる造替ではなく、新宮をご用意し、そこ

に神さまにお遷りいただき、御饌を捧げることにより、ご神威の更新を期するもので、その背景には「常若（とこわか）」（※1）と呼ばれる思想があります。（※1）「常若」いつまでも瑞々しく若々しい状態を現す言葉。すべてのものに魂が宿ると考える神道では、その魂がリフレッシュされることにより、その主体は何度でもエネルギーがあふれる状態になると考える。↓126と同文。

174 「時を紡いで つなぐ技と心 伊勢神宮式年遷宮の一三〇〇年の歴史と匠の伝統」BSフジ、平成二十五年七月三十日放送  
Ba\*……神様は若々しい力を保つのです。……常若を願う精神……。建替えを繰り返すことで永遠の……。

Ba\*（神衣祭）清らかな力を甦らせる……。そこには式年遷宮の常若に通じる精神が籠められています。

175 上田正昭『古社巡拝 私のこころの神々』学生社、平成二十五年八月一日

D\*式年（二十年）ごとに新しい宮を造り、神を「遷御」して、新穀を奉り、来年の豊作を祈るのは、遷宮によって大神が常若（永遠に若々しく）であれと祈念するからである。

176 全国氏子青年協議会全国大会スローガン、平成二十五年八月一日

D\*つなげよう常若のこころ伊勢の地で

177 三橋健『伊勢神宮 日本人は何を祈ってきたのか』朝日新書416、朝日新聞出版、平成二十五年八月三十日

D\*伊勢神宮では二十年ごとに、すべてを新しく造り替えるのには、このような「はつ（果つ）」と「はつ（初）」という両方の意味があり、そこには常に若々しくありたいとの日本人の願いが込められている、（中略）こうした蘇りと常若（とこわか）

の思想を、日本人は稲作に従事する中で、稲から教えられたのである。

D\*このような「蘇り」と「常若」の伝統を継承してきた日本最大の祭典・式年遷宮が、東日本大震災からの復興の祈りであってほしいと願っている。

## 解説

「1」常若の語の検討―辞書の記述と用例

「常若・とこわか」の語は、『広辞苑』に「いつもわかわかしのこと。いつまでも若いさま」と記し、その用例として『林葉和歌集』の「いつとなく君にはひをゆつりはのなほとこわかに栄ゆへらなり」を挙げる。『林葉和歌集』は僧俊恵（一一一三―一一九一頃）の家集で、成立は一一七八年。（なお、異本には「とこわかに」を「とこととはに」とする。）辞書でもっとも溯る用例となる。他に、『成伸集』に「とこわかのかくすりたづねにいでしかど（後略）」がある。同書は、近江・日吉神社禰宜家出身祝部成伸（一〇九九―一一九二）の和歌集。成立は前記『林葉和歌集』と同時代で、俊恵と交流があった。和歌集を集大成する『国歌大観』での用例はこの二つのみである。

のちの用例としては、『岩波古語辞典』・『日本国語大辞典』等に『名語記』（鎌倉時代の辞書。経尊者。初稿六卷本は文永五年（一二二八）、増補十卷本は建治元年（一二七五）成立）に「とくわか如何、とこわか也。常若也。常はつねとよめるを」とつかへり。つねに青ければ、とこわか義ある也」と、「天正本狂言・樗（室町末―近世初）の「今年よりくわんにくらしいをゆづりゑて、殿も常わか、ぢげもとこわか」を挙げる。

このように「常若」の語の初例は平安時代末で、歌語として用いられたはじめ、以降もその例は限定的である。なお本「抄」で、「常若」の語があるとする神宮の古文書(45)、平安時代の遷宮関係の書物(93)、室町時代の古文書(62)等については、その文献の具体名・用例は挙げられず確かめられない。管見では、伊勢神宮・遷宮並びに古代・中世の記録・文献での用例は見出だせない。

ところで古代の語例では、「常・とこ」の下が名詞となる「一世・夜・闇・夏・宮・磐・松・花・葉・少女」などがある。また動詞には「一立」、そして形容詞には「一珍し・懐かし」があるが、「常若(し)」はない。さらに、形容動詞には「一とばに」がある。この接頭「とこ・常」の意を、『岩波古語辞典』に、「トコ(床)と同根。しっかりとした土台、変化しないものの意」永遠・永久不変である意を表す。」とする。ここから「とこしへ・とこしなへ」の語も生じる。

以上のように、「常若」の語は古い用例がある古語に見えるが、具体的用例を確かめると、初例は平安時代末で、またそれが用いられる範囲も限られる。このことは、「常若」の語を用い、理解する際の基礎知識となる。ちなみに、『広辞苑』にみえる『林葉和歌集』の語例に言及するのは本「抄」には一つも見えず、すべて古語とみなして論じているようである。

これから知られるように「常若」の語を神宮・遷宮・神道・伝統などと関連づけ、それを「常若の思想・精神」などと意味づけることは、きわめてあたらしい展開となる。なお観点を別にすれば、特定の語をもってそれらについて新たな意義づけをしようとしているともいえる。いずれにしろ、もともとからそうであったという認識は成り立たない。

参考までに、「わかい」の『広辞苑』での説明を次に掲げる。

(若い・稚い)《形容詞》①幼い。②草木などが生い出してからまだ久しくない。④子供っぽい。あどけない。⑤未熟である。幼稚である。つたない。⑥元氣あふれる年頃だ。青年期。⑦活気にあふれている。血氣盛んである。

このような肯定・否定両様の意味を、『古典基礎語辞典』(角川学芸出版、平成二十三年)での「わかし」の解説では詳しく指摘する。

人の外貌や声など肉体的要素の形容に使われるときは、常によい意味で用いられる。壮年・老年の人物について用いられるときは、青年のように活気があり、みずみずしさや美しさがある意を表す。

人の態度や振る舞いなどにうかがわれる精神的な要素についていうときは、多くが否定的な意味で用いられる。子供っぽい、思慮が浅い、分別を欠いている、技量が未熟である、などの意を表し、根本的に、年齢が低ければ未完成であることを指摘するに止まるが、壮年・老年の人物に用いられるときは、その年齢に達しながら未熟であるとして明らかに短所の指摘になる。

ちなみに英訳は、*everlasting youthfulness*・*Always young* などとなっている。

ところで、「若さ」に関わる古語として「わかえ」がある。『岩波古語辞典』に「わかくなる。若返る。」とする。用例には、「出雲国造神賀詞」に「古川原に生(お)ひ立てる若水沼間(わかみぬま)の、彌若叡(いやわかエ)に御若え坐し」が、『古今集』に「君が八千代に若えつつ見む」(一〇〇三)などがある。

また、いま「常若」の意味とされる内容に近い古語には、「を

ち」がある。『岩波古語辞典』に「(復ち・変若ち)《ヲトコ・ヲトメのヲトと同根》若々しい活力がもどる。生命が若返る。」とする。用例に『出雲国造神賀詞』に「すぎ振るをどみの水の、いやヲちに御ヲち坐し」、『万葉集』の「いにしへゆ人の言ひける老人(おいひと)をつとふ水そ名に負ふ滝の瀬(一〇三四)」等がある。この「をちみず(変若水)」は、若返りの水として古く信仰が存した。

このように、今用いられる「常若」の語の意味に関わる古語には、「わかえ」・「をち」があり、それは「いよいよ若々しく」、「若返る」という意は通じるが、「常」に変わらずに若々しい」という意味を示す語はなかった。言いかえると、そのような思惟は古人にはなかった。

## 【2】時期区分

神宮式年遷宮の意味を説明する語としての「大神嘗祭」と「常若」論の、戦後における大きな流れを、期を分かって次にまとめる。なお、本文ではこれによって区分した。

【第一期】昭和二十八年年度・四十八年度

「大神嘗祭」論が昭和二十八年年度から見え始め、四十八年度に広まり、前回遷宮までは基本的、一般的説明となる。

【第二期】平成五年度に際して

「大神嘗祭」論が主で、「常若」論が神宮関係者から見え始める。

【第三期】今回遷宮に際して

平成十七年三月の木本祭・山口祭日時御治定前後を期として「常若」論が広まる。そしてここ一、二年は数は激増し、主となる。反比例して「大神嘗祭」論は影を薄める。

## 【3】「常若」による説明の内容・分類

「常若」の用例を分類すると、凡例九に掲げた次の項目となる。傾向としてはAからDへ拡がる。それぞれの代表的事例をいくつかづ、示す。(なお、番号は本文と同じ)。参考に、本「抄」事例での割合を【】内に記す。

(A) 国(国家)・民族・国民、生命と関わらせる。【一二%】

07わが国の無窮と民族の常若への祈りをこめて上古以来二十年毎にくり返し厳格に齋行せられてきました神宮式年遷宮の意義……。

29この神嘗祭を二十年に一度、神殿をはじめ神宝、装束類、祭器、調度品等々の全てを新調し、大御神に新宮へお遷り願って齋行し、国家国民の「常若」と悠久の平安を祈ることこそが、式年遷宮の本義……。

(B) 天照大神・神威と関わらせる。【一〇%】

85天照大神の常若は、日本の国魂の常若をも意味する。そのため、天照大神の神威がよみがえることは、日本人の民族エネルギーの再生にもつながったのである。

126私は、常若、というのが遷宮の一番最初の精神であったと思うのです。神様に更に若返っていただき、御力を高めていただく。そのために繰り返されるのが遷宮だと思えます。

(Ba) 神宮の伝統、環境などと関わらせる。【一三%】

70歳を重ねながらも、繰り返し再生することで、若々しいままに「永遠」をめざす—そんな神宮の常若の思想を象徴しているのが式年遷宮なのです。

82神宮にはいつも瑞々しく永遠に若いことを願う「常若」という言葉がありますが、これが遷宮が目指す理念ではないで

しょうか。

116 この遷宮というひとつの祭りを考える際に、キーワードとなる言葉が「常若」です。この常若という思想こそが、神宮の在り方、さらには、遷宮の意義そのものを捉えていると言えるでしょう。常に若々しく、瑞々しくある状態を常若といいます。

(C) 神道・神社と関わらせる。【一四％】

66 神道の中でよく使われる言葉の中に常若という言葉がございます。(中略) 神様は非常に清浄を好まれます。(中略) その最も究極の世紀の大祭典がこの神宮式年遷宮とお考え下さい。127 「常若」いつまでも瑞々しく若々しい状態を表す詞。すべてものに魂が宿ると考える神道では、その魂がリフレッシュされることにより、その主体は何度でもエネルギーがあふれる状態になると考える。

152 遷宮とは、永遠に、常に若々しくすがすがしくありたいと願う神道の「常若」という精神を形に表したものです。

(D) 日本の伝統と関わらせる、不特定。【四〇％】

120 日本古来の常若思想が生んだ遷宮という霊威再生システム。147 神宮式年遷宮とは「常若」の思想である生命力の更新を祈る祭りである。

159 \*日本の神様はお祭りをしないと御神徳は衰えていくことという信仰がある。伊勢神宮はまさにそれで、永遠に若々しくあつてほしいという常若の精神が遷宮の信仰の根底にある。

(※) 「大神嘗祭」論【一二％】

10 式年遷宮の意義を一言でいえば、大(だい) 神嘗祭といえます。(中略) この神嘗祭を最も鄭重にした祭が式年遷宮なのであります。

13 毎年の神嘗祭を二十年に一度、神殿も何もかも新しくして真夜中に行う。大神嘗祭が、式年遷宮祭にほかならない。

16 遷宮の本義とは「大神嘗祭」と称されるように新たな神座で初穂を召し上げるため、遷宮と神嘗祭が一体となることが理想視されていたのです。

なお分類した(A) から(D)(※) にあつては、それらが重複して論じられる例も多い。傾向として(D) が、この一、二年に顕著となる。

また、①遷宮は「常若」を目的・意図して行われるのか、②あるいは遷宮の結果として「常若」となるのか、という区別はあまり意識されていない。ちなみに、これらで言及されていない事柄・事項は、天皇との関わりである。「天皇の常若を祈る」云々という趣旨の説明はされていない。

[4] その他

以下、「常若」について考えるに際して留意すべきことを列記する。

一、前回遷宮にあたり伊勢神宮式年遷宮広報事業推進本部が公募し、最優秀賞となり、用いられた標語は「よみがえる日本のこころ御遷宮」(昭和六十三年)であった。キーワードが「よみがえり」から「常若」へとなる。ちなみに「よみがえる(蘇る・甦る)」は、「広辞苑」で「(黄泉からかえる意) 生きかえる。蘇生する。失っていた活力を取り戻す。」とある。この語意・語感への異和感・反撥からか、「常若」(常に若々しい)が無意識であれ、意識的にであれ、よりふさわしいとして関係者にあつては求められているかと推測される。二、意義を簡明に説明し、納得するにあたり、「大神嘗祭」論

だけではすぐには理解しがたく、また満足されないもので、わかりやすく、受け入れやすいキーワードとして「常若」の語が用いられるようになり、またその「常若・とこわか」という字面のよさ、耳への入りやすさも合わさり、言葉が独り歩きして広まり、その内容も自己増殖していると推される。それゆえに「常若」の語が否定的に(いつまでも幼い、未熟であるなど)用いられることはない。

ちなみに「若々しさ」についての一般の意識を示す、興味深い記事が『日本経済新聞』平成二十四年二月二十四日号に「博報堂新しい大人文化研究所による平成二十三年十月実施のインターネット・アンケート結果として掲載されている。

\*四十七～六十代の男女にとって、最も言われて不愉快な言葉は「頑固」で、うれしい言葉は「若々しい」だった。

\*言われてうれしい言葉は男女とも「若々しい」がトップで、男性が三五%、女性が四九・八%。(中略)。最も低いのは「成熟した」で、男性が九・四%、女性が六・九%だった。同研究所は「今は六十代でも女性に限らず成熟より見た目の若々しさやセンスを重視する時代」と分析している。

ここからは、現在、「常若」の語、言いかえると「永遠の若さ」を希求する一般にアピールし、受け入れられやすい時代・社会状況がうかがえる。

三、「常若」の語の性格は、「大神嘗祭」と対比すると、ともに新たな造語であるが、後者は学術的・実証的背景を有するのに対して、前者にはそれはなく、観念的・抽象的となる。かつてそれゆえに時代・社会に受容されやすくなっているといえようか。(発信・受信側双方にとって)。

四、今回の遷宮に際しての関心は、「論より証拠」ではなく、

「事実(歴史)」よりも「論(意義づけ)」に傾いており、学術研究面での関心・成果は客観的にみて前回以前と比べて高くない。

五、「常若」論の発信者を分類すると、①神宮司庁当局・関係者、②神社界(式年遷宮広報本部・神社本庁・神社人)、③行政(三重県・伊勢市)、④観光関係(近鉄・JR東海)、⑤出版・ジャーナリズム・マスコミ、⑥個人(研究者(國學院大學・皇學館大学主)・一般・インターネット)等、各方面に行き渡っている。なお、発信対象はほとんど一般向けで、学術的論説で用いられる例はごく限られる。

六、「常若」論の今後の見込みは、本年五月に齋行された出雲大社の「大遷宮」とも関わりつつ継続すると推測され、今回の神宮遷宮に際してその意義を説明するキーワードとなっていることは確かである。

今、遷宮についてあえて「意義・本義」を問い、答えを探り、説き、伝えようとするにあたって求められるのは、それが「不易」をふまえたその時代にふさわしい「流行」の姿なのか。あるいは「一時の流行」にすぎないのか。いずれにせよ、一語のキーワードによ(抛・頼)ることのない自覚・反省となると考える。

(神社本庁教学委員)